町家の保存を通じた地域振興

－奈良県御所市「御所まち」における調査研究報告－

奈 良 県 立 大 学 地 域 創 造 学 部
小松原研究室・石川研究室

目　次

はじめに……小松原　尚……1
第１章　御所まち町家調査の概要と考察……石川 敬之……4
１．はじめに……4
２．アンケート調査の概要……4
３．町家を生かした御所まちの観光振興に関する検討……9
【第一章補論】ごせまちなみまちや調査報告（奈良県立大学学生まちなみ調査チーム）・13

第２章　歴史的町並み保存研究の考察と課題……東帆奈美……20
はじめに……20
１．町並み保存研究の視点・視角の傾向……20
２．町並み保存研究の対象とする地域の特徴……22
３．町並み保存研究を整理し明らかになったこと……24
まとめ……28

第３章　地域振興にかんする先行事例の分析と御所まちへの適応可能性……
……石川 敬之・鴻池 祐香・辻 賢……31
１．はじめに……31
２．類型Ⅰ：「環境問題型」……32
３．類型Ⅱ：「景観問題型」……33
４．類型Ⅲ：「産業衰退型（第一次産業）」……34
５．類型Ⅲ：「産業衰退型（第三次産業）」……35
６．類型Ⅳ：「人口問題型」……37
７．小括……38
資料……40

はじめに

暑さの厳しかった2010年の夏、その始まりの頃の6月に、御所市の皆さんとのお付き合いが始まった。「NPO ごせまちネットワーク・創」の楠孝夫さんから中心市街地の歴史的まちなみに関する調査活動へのお手伝いの依頼を受けた。そして、活動内容を煮詰めていく中で、調査活動への学生参加の可能性と方法に関して検討することになった。こうした試みは学生にとっては地域の方々との交流を通して、講義では得られない実体験に基づく学修活動の一環となる。私としては、是非とも多くの参加者を得たいと思い、案内文の掲示に加え、私のゼミナールに参加している学生など本件に関心を持ちそうな学生への働きかけを行った。あいにく、夏期休業期間に入ったこともあり、募集は思うようには進まなかった。

残暑もひと段落ついた後学期、講義の再開をまって再び募集を開始した。アルバイトに忙しい学生が少なくないことを踏まえ、調査実施日を 11 月 28 日と定めて、この活動に関心を抱きそうな学生へも積極的に働きかけた。その結果、最初の説明会（10 月 15 日）には 10 名弱の参加を得た。この説明会で参加の意思表示をされた学生諸君と共に調査チームを編成して課題に取組むことにした。２回の学内での検討会（10 月 15 日、11 月 19 日）には楠さんが必ずご出席下さり、必要かつ十分な情報提供を賜った。これらは、学生諸君が調査対象地に対する認識を高める上で大いに役立ったと思う。

そして､11 月 28 日の調査当日､参加学生全員の集合時間には若干の時差があったものの、無事に調査活動とその後の集計作業も終えられた。御所に暮らす方々とチームを組んで、ご案内をいただき、「まちなみ」への思いをうかがいながらの調査活動は、日常の大学生活では得難い数多くのインパクトがあったことと考えられる。無事に調査活動とその後の集計作業も終えられた。御所に暮らす方々とチームを組んで、ご案内をいただき､「まちなみ」への思いをうかがいながらの調査活動は、日常の大学生活では得難い数多くのインパクトがあったことと考えられる。今回の目的は概ね達せられたと考えられる。

2012 年 7 月に楠さんから連絡をいただいた。これまで NPO で申請していた「町家等地域資源発掘･発信事業」の補助事業計画に対して、奈良県より、若干の補助金が付いたとのことであった。今回の補助事業は、大学とまちづくり団体・奈良県の協働・古民家活用・地域コミュニティーと NPO の活動による情報発信が主になり、われわれ教員と学生諸君はこの「活動のコーディネーター」をとの依頼であった。実質的には、御所まちにおける町並み保存活動の現状調査のお手伝いということであった。

8 月に入り、NPO の皆さんによる意識調査や活動を進めるため、われわれ奈良県立大学の学生有志と話合い、お手伝いの可能性を探るための打合せに参加した。ただし「意識調査や本事業進行は、執行部の中での検討事項」との連絡を事前に NPO からいただいていたので、小松原が事前に資料としてお送りしていたアンケート質問事項に関して NPO 執行部の

方でどのように検討されたのかその結果を提示していただけるものと考え、会議に臨んだ。しかし、結果的には執行部の検討結果は示されることなく、小松原が事前に送っていた資料すら会議資料とはなっていなかった。私の方からは、教員として、学生の学修活動の範囲でのお手伝いであることを述べ、「失敗も勉強であり、そのために学生に教員は失敗させることもある」ということを伝えた。この間、われわれの大学としてはこの御所のプロジェクトを教員２名体制で対応することにした。新たに加わった石川准教授は、経営学の専門で、NPO 活動にも関心のある若手教員である。

10 月 27 日（土）、13 時より打合せ会議を始めた。アンケートを含む調査活動について NPO の方々との打合わせ、そこで確認した項目を踏まえて、試行調査を実施した。この結果を踏まえて、聴き取り事項などの加除修正の検討をおこなった。最後に今回の調査を行ってみての情報共有化と活動内容の改善点を話し合った。終了は 17 時過ぎ、現地で解散となった。今回の試行調査に参加した学生の報告の中では、インタビュー調査の結果からわかったこととして、建築年代、建築方式などのご自宅・町家に関する詳しい知識をもっている住民の方もおられたることに感心していた。例えば、木材はすべてケヤキの木を使用しており、釘を使わずに組み合わせによって建てられたものであることや、重厚建築のため地震のとき横揺れは激しいが、家屋の物が落下したり、壊れたりしたことはない。ということに興味深かったことが記されていた。また、NPO の方からは、御所が持つ古民家を活かして活気あふれる多くの人が訪れる町にしたいことや、町家、古民家を活用した伝統的・文化的なまちづくりへの意欲が語られた。

11 月 11 日、いよいよ本調査である。この日は御所市のメインイベントの一つである「霜月祭」の日でもあり、NPO の皆さんは祭の方に集中せざるを得ず、学生を中心とした調査活動となった。学生たちにとっては、直接まちやにお住いの方々よりお話しを伺う機会を得て、大いに勉強になった。学生から住民の方への質問内容と回答をいくつか紹介しておく。

「町屋を有効に活用する方法として、どのようなものが思い浮かびますか」という質問に対しては、「わからない。このまま現状維持をするのが精いっぱい」。「今の御所についてどう思いますか」に関しては、「若い人がいない。高齢者がほとんどとなってしまっている。若い人に御所にきてもらい、まちが活発になってほしい、」という意向が示され、そのためにも「外からの人を受け入れてくれるまち。閉鎖的なまちでは決してない」という考えが伺えた。「御所のまちで生活する上で不便だと感じるところなんですか」と尋ねると「昔からある道は狭く、一方通行の道路も多い為大きな車が通りにくく不便に感じている」という答えが寄せられた。「人口が少なくなっていることについて、どうお考えですか」と聞いてみると、「若い人がほとんど外に出て行ってしまっているため、高齢者ばかりでさみしい」との回答を得、さらに、「観光客が来ることについて（観光地化することについて）は」、「観光客が来ること自体は賛成。現在住んでいる町屋を観光客に見学してもらうことにも賛成」と答えつつも、「しかし、御所について観光客にＰＲするものはないと感じている」との答えだった。

今回の調査で、学生たちは、御所まちの町家を、より深く理解し、改めて我々の故郷の素晴らしさを再認識する機会ともなった。尚、12 月 1 日には追加調査も実施した。

年末から年始にかけて、アンケート調査結果の集計と分析に取り掛かった。石川研究室の 1 年生が中心となり取組んだ。そして、2013 年 2 月 16 日（土）には町屋等地域資源発掘・発信事業に基づき、2012 年度に学生が実施した調査・研究活動の成果を報告した。その報告会を踏まえて編んだものが本報告書である。ごせまちネットワークの皆さんとわれわれとの共同作業の成果の一部である。ここで得られた経験を大学における各自の研究活動に活用できれば、今回の試みは 1 つの大きな成果を得られたことになる。もう一方で、学生が得た知見を地域の皆様に検証していただくことも学修の進化にとって重要である。

2013 年 3 月吉日

小松原　尚

第１章　御所まち町家調査の概要と考察

石川敬之

１．はじめに

本調査では、御所の町家に住んでおられる方々を対象に、住居に関する基本的な情報の収集、住民の方々の町家に対する意識、また御所まちの今後のあり方などについて調査を行った。本章では、アンケート結果の概要を述べ、その後、御所まちの町家を活かした観光と関連した分析を行っていく。

２．アンケート調査の概要と調査結果

まず今回のアンケート調査の概要を記しておく。アンケートは２０１２年１１月１１日に現地にて行われた。調査は奈良県立大学の学生スタッフが中心となり、町家に住まわれている住民の方々への留め置き法によるアンケート調査とした。また、アンケートの回収時に、住民の方へのインタビューも行い、居住されている町家や御所まちについての意見などを伺った。その際の情報は、本報告書を作成する際のデータ分析や提言などにおいて参考とした。

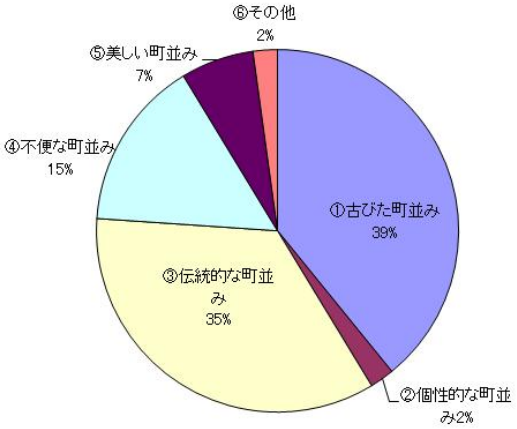
アンケートは４０戸から回答を得た。ちなみに各住民の方には、事前にアンケート調査実施に関する依頼を行っていた。現在、御所まちには１２０～１３０戸の町家があり、今回の調査では、全体の３割ほどの方々から回答を得たことになる。

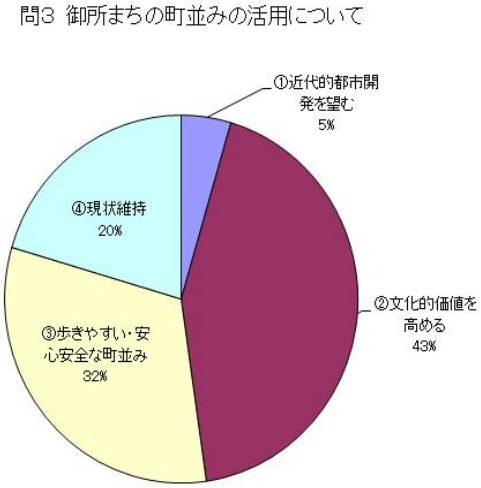
では、アンケートの調査結果について順に説明していく。はじめは住居そのものの概要についてである。アンケートの第１問では、現在、住まわれている町家の建築年代と敷地の広さ、延べ床面積について回答してもらった。建築年代については、はっきりした年号まで覚えておられる方は少なかったが、多くは江戸時代から明治時期にかけて建築されたものであった。敷地面積の平均は約 210 ㎡で、延べ床面積では 120 ㎡ほどであった。

問２では、御所まちのイメージについて伺った（次頁図参照）。回答からは「古びた町並み」、「伝統的な町並み」との回答が８割近くを占めた。御所まちでは、「古風な」という形容による町のイメージ形成を目指しており、「伝統的」という言葉はそれに近い。ただ、それでも「古びた」というイメージが同程度存在することは、目指すものとの間に乖離があることを示している。また「不便な町並み」との回答も 15%あり、「古びた町並み」と合わせると半数を越える。この事実は単なるイメージだけでなく、まち全体にそうしたことをもたらす客観的事実が存在していることを示すと考えられる。それを明らかにしていくことが大きな課題であるということが理解される。

続いて問３は、今後の御所まちのあり方、進むべき方向性についての質問である。「近代的な都市開発」「文化的価値の向上」「安心安全な町」「現状維持」という選択肢のうち、「文化的価値を高める」という回答が最も多く、全体の４３％を占め、次に「歩きやすい、安心安全な街並み」が３２％と続く。近代的な開発を望むとする意見は全体の５％となっている。一方、全体の２０％は現状維持を望んでいた。この回答の背後にどのような意味合

いがあるのか、すなわち開発に対するネガティブな意見か、それとも現在の町並みに対する積極的な評価かについては今回の調査ではあきらかにできなかったため、今後、補足的な調査が必要である。

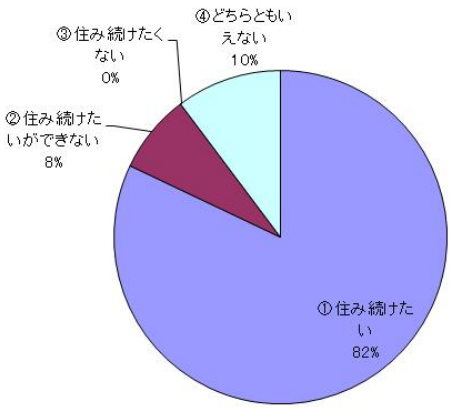




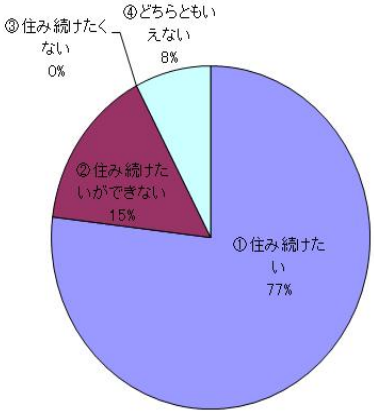
問４では、今後もこの御所という場所に住み続ける意向があるかどうかを尋ねた。回答の結果、住み続けたいという意見がほとんどであったが（全体の８２％）、一方で、住みたいという意思があっても、それができないとする意見もあった（同８％）。これらの理由については、後に続く設問と関連しているので順次述べていくことにする。

問５では、現在の住居に住み続ける意向があるかどうかについて質問を行った。問４と同じく住み続けたいとされる回答がほとんどであったが、ここでも少数ながら住みつづけたいができない回答があった。問４との関連でいえば、御所まちに住み続けたいという意向も持ちつつも、住居の問題で住み続けることができないと回答された方がおられ、住居問題が深刻であることが明らかになった。具体的には、「住居の維持・修繕費」についての強い懸念（問６）と後継者が決まっている家が二軒だけという「後継者の問題」（問８）が明らかになっており、この二つの要因が、現在の御所まちの維持にとって大きな課題になっていることが確認された（次頁図参照）。

問4 今後も御所まちに住み続ける意向について

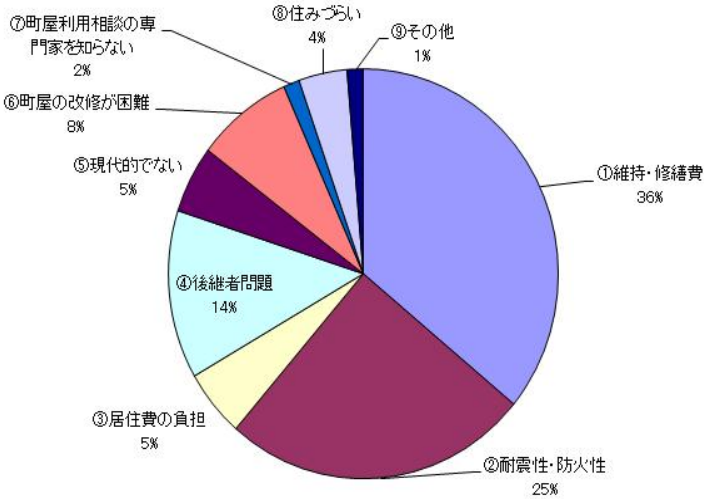


問5 いまの家に住み続けたいですか？



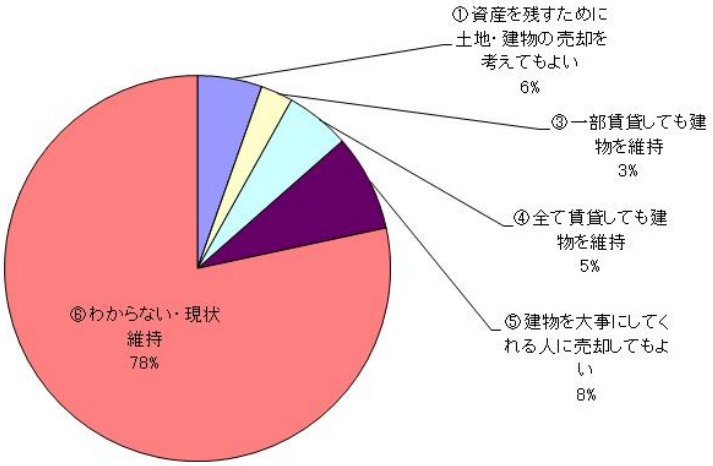
問６では、現在の住居の諸問題についての質問を行った。複数回答によって現時点での問題を指摘してもらうと、最も多い回答に、住居の「維持費・修繕費」が挙がり、続いて、「耐震性・防火性」となった。建物自体の問題だけでなく、後継者の問題も課題としての上位に挙がっており、町家ならではの問題が浮かびあがる結果となった。

問6 現在の家に住み続けるうえでの問題点



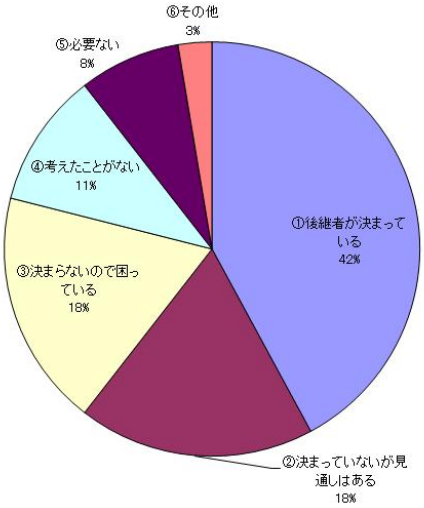
問７は、今後の土地・建物利用の予定についてであるが、「分からない・現状維持」が８割近くを占めた。おそらく現状維持というのが実情であると考えられる。

問7 土地･建物の今後の利用について



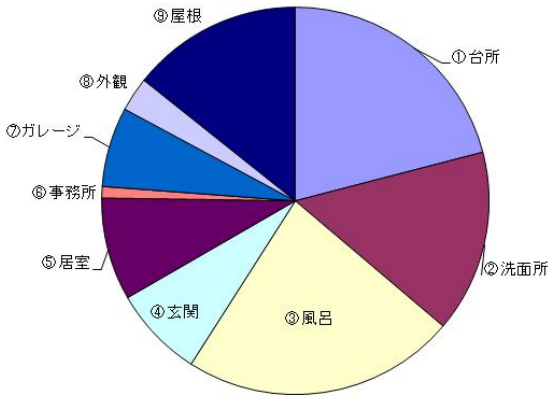
問８では、先ほど生活するうえでの問題点で挙げられていた「後継者問題」についてより詳細な質問を行った。ここからは、全体の６割において、家屋の後継者についての見通しがあるとの情報が得られた。逆に、後継者が決まっていないとする家が２割弱であり、前述のように、この点に御所まちを存続、発展していくうえでの課題が存在するといえる。

問8 後継者について

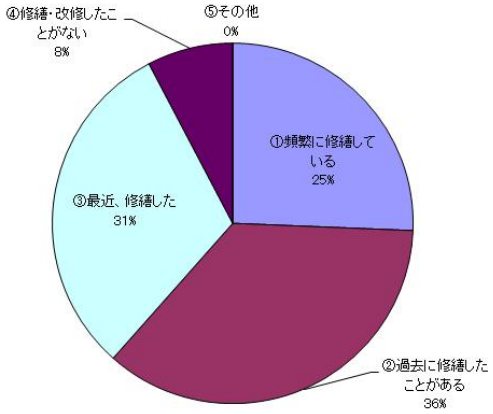


続く、問９と問１０は、家屋の修繕箇所と修繕の有無・頻度について尋ねたものである。詳細は下記図表を参照されたい。

問9 家屋の修繕箇所について



問10 修繕の有無について



さて、本節で最後に取り上げるのが、問１１の「御所まちの町・町並みを観光資源として利活用することについて」である。この質問への回答には「賛成である」「反対である」「一長一短・どちらともいえない」「その他」の４つが用意された。集計の結果、「賛成」と答えた割合が全体の６０％、「反対」が３％、そして「一長一短・どちらともいえない」が３７％となった。明確な反対意見は極めて少数であるが、「一長一短である」との回答は４割近くを占めることには注意しなければならない。おそらく、そこには全面的に賛成できない要因が存在するからと考えられるが、それを探り当てていくことが今後の御所まちの振興を考えるうえで重要な要件になる。次節では、この問いを軸としながら、他のどのような要素との関連性があるのかを探索的に検討していく。

【注釈】直接的な分析対象とはしなかったが、今回のアンケートでは、次の３つの質問も実施している。問１２では、町家･街並みを利活用したまちづくりを進めている団体を知っているかどうかである。多くの住民が知っていると答え、特に「ごせまちネットワーク・創」の名前を挙げられた。知らないという方は全体の３分の１ほどであった。問１３は、この御所まちで残したいと思う町家を具体的に挙げてもらった。赤塚邸をされる方が多く、その理由として郵便局の名残りが良いというものがあった。他には、吉村邸、西尾邸、また町家ではないが鴨都波神社、あるいは霜月祭をあげたかたもおられた。最後１４問目は、建物の文化財の種類の認知度について調査を行った。国宝や、重要文化財、登録有形文化財、指定文化財など比較的有名な名前を知っておられる方は多かったが、自治体の登録文化財や指定文化財はあまり知られていなかった。本アンケートの実施母体である「ごせまちネットワーク・創」が目指している町家の文化財登録について、その周知活動の必要性が認められる結果になったといえるだろう。

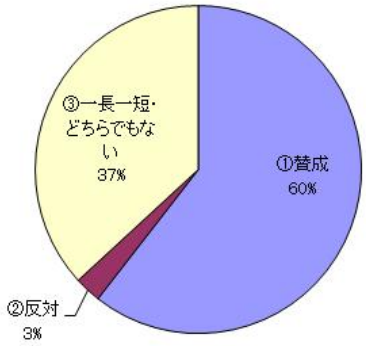
３．町家を生かした御所まちの観光振興に関する検討

今回の調査の最終的な目的は御所まちの振興である。特に、町家という資源を活かした町の活性化である。町を活性化するうえでは様々な方法があるが、御所まちにおいては、町家の文化的な価値を発信し、それを観光につなげていくことが、現時点での取り得る現実策となっている。

こうした考えに基づき、本アンケートでも、町家・町並みを観光資源として利活用することの是非について質問を行った（問１１）。そして、前節でも述べたように、アンケートに回答した多くの住民が町家を観光資源として活用することに賛成としていた。ただ、町の観光振興では住民全体の協力が重要になってくるため、活動に対する不安や明確な反対意見には真摯に対応しておく必要があるだろう。

今回の調査では、町家・町並みを観光資源として利活用することに対して「反対」とする意見は３％と少数であったが、それでも「一長一短・どちらともいえない」とする意見は３７％存在していた。積極的に賛成とならない背後には、何らかの要因、不安が存在するといえ、それが後々に大きな問題となってくる可能性がある。従って、ここでは御所まちの観光振興に対する異なる意見を二つのグループに分け、その差異に関連する要因を探索的にみていく。この作業を通じ、町家の活用、町並み保存、そして、それらを生かした観光振興に向けた取り組みを行ううえでの課題を抽出していくことにする。

問11　町屋・町並みを観光資源とすることについて



（１）御所まちに対する印象と観光化への意向

地域の将来の方向性を考えるうえで、地域住民の意向は重要な意味を持つ。実際のまちづくりや観光振興においては、地域の住民はその対象者であると同時に協力者だからである。では、御所まちの町家に住まれている方々は、自分たちの住む地域をどのように見ているのか。そして、その思いや考えは、町家を観光資源として利用することとどのように関連しているのか。ここでは、この両者の関係性をアンケートによる集計結果にもとづい

て検討していくことにしたい。

はじめに、現在の御所まちの町家に住まれている方々の御所まちに対する印象と、町家・町並みの観光資源化との関連性を見ていきたい。御所まちの町家・町並みを観光資源とすることに「賛成」とする回答者と「一長一短・どちらでもない」とする回答者を対象に、現在の御所まちの印象について比較したところ、実は両者間にいくつかの相違が見られた。

まず、御所まちを「個性的な町並みである」あるいは「美しい町並みである」と高く評価するかどうかで両者間に明確な違いが出た。町家・町並みの観光資源化に「賛成」とした住民のなかには、御所まちを「個性的な町並みである」、あるいは「美しい町並みである」と評価するものが存在しているが、逆に観光資源化に必ずしも積極的でない住民では、そうした評価は皆無であった。では、後者の回答者が御所まちにどのような印象を持っていたのかといえば、「古びた町並み」「伝統的な町並み」、そして「不便な町並み」というものであった。はじめの２つにおいては観光資源化に賛成とする住民も同様に感じており両者に差は無いが、「不便な町並み」という印象については、賛成ではない住民の割合が高くなっている。つまり、観光化に賛成の住民は町の良いところに目を向け、懐疑を持つものはマイナスの部分を心配していたのである。これは観光振興の方向性を決める際の重要な考慮要件であるとともに、住民の協力、参加動員を実現させるうえでも大きな意味を持っている。プラスの要素をどのように生かし、またマイナスの要素にどのように対応していくのかが課題になってくることが明らかになるといえるのである。

	現在の御所まちの印象について					
町屋・町並みを観光資源とすることについて	①古びた町並みである	②個性的な町並みである	③伝統的な町並みである	④不便な町（並み）である	⑤美しい町並みである	⑥その他
賛成である	46%	4%	46%	8%	13%	4%
一長一短があり、どちらでもない	43%	0%	36%	36%	0%	0%

（２）御所まちの今後と観光化の関連性

次は、御所まちの今後の展開に対する意向との関連性についてである。ここでも「賛成派」と「慎重派」との間に大きな相違が確認できた。観光振興について賛成であるとする住民は今後の御所まちについて「文化的価値」を高めることに大きな期待を寄せていた。一方、観光振興に積極的でない住民は「歩きやすい・安心な町並み」とすることを望んでいた。上述の分析でも確認したように、御所まちに対しては「不便な町並み」という印象をもっている住民が存在しており、そうした人々がここで「歩きやすい・安心な町並み」としての御所まちを望んでいるものと考えられる。現時点で、御所まちが特に「歩きにく

く・安全でない」ということではないだろうが、御所まちの観光化の進展に対して少なからず影響を及ぼしていることは本データから明らかになることである。この課題に対して今後どのように対応していくのかが問われることになるだろう。

	御所まちの町並みの今後について				
町屋・町並みを観光資源とすることについて	①近代的都市開発を望む	②文化的価値を高める	③歩きやすい・安心安全な町（並み）にする	④現状維持	⑤その他
賛成である	4%	63%	17%	29%	0%
一長一短があり、どちらでもない	7%	36%	71%	7%	0%

（３）居住希望と地域の観光振興について

御所まちと観光振興の関連において最後に取り上げるのは、この地域での居住希望についてである。本アンケートでは、住民の方々に対して、御所まちでの今後の居住継続の意思を尋ねた。結果は、ほとんどの方がこれからも御所まちでの居住を希望していた。ただ、観光振興の是非との関係からみると、御所まちの観光化に消極的な住民の中には「住み続けたいができない」と答えた方がおられた（１４％）。そしてこのことは、次に述べる後継者問題と関連していた。

	今後も「御所まち」に住み続けたいかについて			
町屋・町並みを観光資源とすることについて	①住み続けたい	②住み続けたいができない	③住み続けたくない	④どちらともいえない
賛成である	83%	8%	0%	8%
一長一短があり、どちらでもない	79%	14%	0%	14%

実は、今回のアンケート分析から明らかになったことに、御所まちの観光振興に積極的な評価をしている住民は、現在住んでいる町家を引き継ぐ後継者がすでにいる、あるいは見通しが立っていると答えた割合が６割を越えているという事実があった。また逆に、観光振興に積極的ではない住民においては、「（後継者が）決まっていないので困っている」とする割合が３割を越え、賛成派の３倍近くとなっていた。つまり、御所まちにおける町家を通じた地域振興の是非は、自らの住居の継承という、より現実的な問題と関わっていたわけである。

実際、このことは「町家に住み続けるうえでの問題点」を尋ねた質問においても確認されることであった。町家を生かした御所まちの観光振興に積極的でないとする回答者においては、現在の家に住み続けるうえでの問題として「後継者問題」および「居住費の負担」という点で高い値になっていたのに対し、観光化に賛成している住民は、「現代的でない」、また「町家の改修が困難」という今後も住んでいくことを前提した回答をしており、積極派ではないグループとは全く逆の傾向となっていた。つまり、地域振興という問題は、町家に住む住民の日常レベルの問題と密接に関わっており、まずはそれをクリアすることが重要であったのである。以上がアンケート調査から明らかになったことである。

	後継者について					
町屋・町並みを観光資源とすることについて	①後継者が決まっている	②決まっていないが見通しはある	③決まらないので困っている	④考えたことがない	⑤必要ない	⑥その他
賛成である	50%	13%	13%	13%	4%	0%
一長一短があり、どちらでもない	29%	21%	36%	7%	7%	0%

	いまの家に住み続けるうえでの問題点について								
町屋・町並みを観光資源とすることについて	①維持・修繕費	②耐震性・防火性	③居住費の負担	④後継者問題	⑤現代的でない	⑥町屋の改修が困難	⑦町屋利用相談の専門家を知らない	⑧住みづらい	⑨その他
賛成である	75%	42%	4%	13%	13%	21%	0%	8%	4%
一長一短があり、どちらでもない	71%	64%	21%	36%	7%	7%	7%	7%	0%

（4）小括

ここまで、シンプルであるが「御所まち」の今後の方向性を定めるうえで重要となる分析を行ってきた。分析を通じては、現時点で御所まちに住まわれている方々の思いや考え、またそれをもたらす客観的な要因について抽出することができたといえる。今後は、これらの点に考慮しながら、御所まちにおける「町家・町並みを生かした観光振興」のあり方を考えていくことが求められる。特に、地域振興での地元住民の協力は不可欠であるため、いまの地域の方々の意向を汲み、問題点に対応することが大切である。それによって、地域全体に将来の方向性を考えていこうとする機運がもたらされることになると考えるのである。

第１章 補論　ごせまちなみまちや調査報告（奈良県立大学学生まちなみ調査チーム）

西地区１班

・担当箇所は、西町、中央通り一丁目、中央通り二丁目、御堂魚棚町、神宮町、西久保本町、中本町、本町である。

・この地区は町家の数に対し、町家商売数が他の地区よりも比較的多い。

　１班の地区：50 軒中 9 軒（18%）２班の地区：58 軒中 9 軒（16%）

　３班の地区：46 軒中 1 軒（2%）４班の地区：84 軒中 11 軒（13%）

・つし二階と呼ばれる造りの町家が多く見られる。

・西町は全体の面積に対し、町家が占める面積が大きいが軒数が少なく、

　一軒一軒の土地が広い。駐車場や空き家も比較的少なく、町家と住宅が密集している。

・中央通り一丁目は町家があまりなく、新しく建てられた住宅が多い。

　他の箇所よりも比較的小規模な町家が多い。

・中央通り二丁目はお店をしながらその後ろ側を住居にしている町家が多い。

　現在も住まれている町家が多い。

・御堂魚棚町は町家の数と新しい住宅の数が同じ位ある。

・神宮町は自治会軒数の 27 軒に対し、町家と町家商売をあわせた 8 軒しかなく

　新しい住居の割合が非常に高い地域である。

・西久保本町は左上の地域を除いては町家がかなり密集した地域である。

・中本町は同じくらいの規模の町家が道に沿って立ち並んでいる。

・この班では実測軒数が 1 軒のみであるが本町は比較的町家が少ない地域である。

・家の下を川が通っている箇所がある。

・空き家が地域の外側にばかりある。

（岩井里賀）

西地区２班

御所町悉皆調査の分布図を見たところ、全体として、町屋が多く残っていることが分かる。また集計表を見ても、実測軒数計のうち、空き家や町屋商売数も全てを含めた町屋数が 59.3%と、約 6 割の町屋が残っている。

しかし、分布図を見ると御所町全体として、点々と各地区に空き家が見られる。数値としても、すべての町屋数のうち、空き家となっている割合が 23%と約 2 割が空き家となっている。また、分布図を見ると、空き地（駐車場）になっている所も多く目立っている。数値としても、実測軒数のうちの空き家の割合が 13%である。更に、空き家がこのまま誰にも利用や改修等もされず維持が困難になり、万が一取り壊しを行い、空き地となった場合の数値を出すと、その割合は 27%と約 3 割が空き家（駐車場）になってしまう。

西御所２班の担当箇所の特徴としては、分布図を見ていると、１班や３班と比べて比較的小さな町屋が凝縮して残っている印象を受ける。町屋調査中も古い町屋が道沿いに数軒

も並んでおり、ほとんど歩かないうちに町屋に出会い、調査記録を書いていた覚えがある。数値としては、御所町全体の町屋数のうち、２班の町屋の割合が 29%と約 3 割の町屋が残っている。その町屋の中でも、平屋の 2 軒長屋や 3 軒長屋が多く見られた。また壁などの表面が商売用に新しく塗り替えられていたり、１階や２階が部分的にコンクリートやトタン、タイルに造り変えられていたりもした。そのため瓦を見たり、家の奥まで入ったりすることで、町屋かどうかを判断していた。このように一目見ただけでは分かりにくい町屋も多くあった。他にも、土壁や茅葺き屋根をトタンで覆ってはいるが、古くなって部分的にむき出しになったままの空き家も数件あり、このままでは新しく人が住むことが難しそうな町屋も見られた。やはり空き家になってしまうと家屋の状態も良いものではなくなり、維持が困難になることを調査をしながら窺うことができた。しかし空き家でも、人が住んでいるのではないかと思わせるような状態の良いものもあった。

また町屋ではないが、大変新しい家屋で２階建ての妻入りのような家も見られた。真新しい現代風に造られたアパートも他の地区で見られたが、その妻入りのような家屋は周辺の町屋との調和を考えて建てられたものか、建物自体に新しい要素を取り入れながらも、そこまで大きな違和感なく感じられた。

他には、草の生い茂った空き地や駐車場が鴨口町周辺や南中町に特に多く見られた。他の町にも、町屋が続く中に点々と空き地がある。中には、以前長屋が建てられていたが、取り壊され、駐車場になったというところもあった。

２班の調査区域では、鯛や名前の入った細工された瓦やばったん床几、酒造蔵に付けられた大きな杉玉など、商家としての古い町屋が状態良く残っているものあれば、このまま維持し続けることが困難そうな空き家もあった。とはいえ御所町を歩いていると、第一印象として古い町並みが多く残っており、そこだけ空間が変わり、時間の流れもゆったりと過ぎているような印象を受けた。御所町全体の状況として、空き家と町屋商売数を含めた全ての町屋が 59%残っている。しかしここから空き家を抜かした場合、46%の町屋が残ることになる。仮に、このまま空き家をそのままにし続け維持できなくなった場合、町屋の数が半数以下に減ってしまう。今回の調査によって、御所町の特徴や魅力を知ることができたが、それと同時に御所町について更に考える必要もあることを改めて感じた。

（中嶋千尋）

２班の西御所における特徴は、古い町家が多いが、比較的新しい町家もあるという点が挙げられる。特に、１階は古く、２階が塗り替えられて新しくなっている町家がある。古い町家の壁をトタンにしているところがあったり、コンクリートにしている部分もあったりする。また、２階が高い町家、そして三軒長屋や二軒長屋も多く見られる。

西久保本町においては、空家が目立つ。鴨口町においては、他の地区に比べて、町家商売数が多い。また、全体から考えると、所々に空地や駐車場が見られる。

まとめると、２班の西御所では、古いそのままの町家と改装などをして新しく作り替え

た町家がある。古い町家はその時代の特徴や趣がそのまま残っている。新しい町家は、全てを新しく作り替えている町家と所々を新しくしている町家に分かれる。裏や１階は古いままで、表や２階などの部分を塗り替えている町家が多い。古い町家は、古い瓦のある町家が多く、瓦にそれぞれの時代の特徴が表れている。また、妻入りで幕板のある町家が特徴的である。町家商売では、酒造の町家が大きく、杉玉があることが特徴的である。

（前田理奈）

西地区３班

私は第３班で調査を行ったが、その時は町屋で空き家が多かった印象がある。この集計表を見ると、やはり他と比べると 20 件と多くなっている。その空き家でも、まるでホラー映画に出てきそうなほど荒廃が進んでいる空き家があり、御所の町並みを、景観を残して、観光客などに見せるとするならば、あの廃屋と化した空き家を早急にどうにかすべきであると思う。市で取り壊すなどして空き地にした方が、まだ景観は損なわなくて済むと思う。町単位でみると、空き家が特に多いのは本町で 6 軒。分布図でみると、あまり大きな空き家はない。何軒か空き家が連なっているところも(23,30)ある。

町屋の数は全体で 46 軒。特に多いのが六軒町で 12 軒。窓が低い町屋が多い。一見、町屋なのかどうかわからない家が多く、町屋なのか、単に古い家なのか区別がつきにくかった。分布図でみてわかるのが、縦に長い町屋が多い。３班の調べた町屋には、二コ一の町屋があまり見当たらなかった。そして一つの玄関の中には何個も町屋があるという大きな町屋もあった。

空き地の数は全体で 17 個。特に多いのが六軒町と本町で 5 個。駐車場となっているところもあった。分布図をみてみると、こちらも町屋と同じく、縦に長い空き地が目立つ。きっと昔町屋があり、何らかの理由で町屋を壊してしまった跡であろう。同じ形の町屋が続いて並んでいるのに、そこだけぽっかり穴があいたかのように空き地があるところがあり、少し残念だった。町並みの景観としてもあまりよくないと思った。

新しい家（町屋ではない家）が、３班の地区には比較的多い。分布図でみると、六軒町、神宮町のあたりが多い。

その他の班の地域をみて思うのが、町屋でも、縦に長い町屋が２班の調べた地域には極端に少ない。小さい町屋が密集している。特に鴨口町、東久保町、南中町。２班の調べた地域には町屋で商売をしているところが多い。そして、町屋の数が一番多いのも 58 軒で、この地域である。空き家の数も一番多く、35 軒。東御所には二コ一の町屋が多い。大きなお寺を囲むようにして、町屋がならんでいる。（東帆奈美）

東御所

今回、私が調査した東御所町は商業が盛んな西御所町とはちがい歴史的に有名な寺社が多い町だと伺っていた。そのため、調査する前に「おそらく町家が多いのではないか、ま

た寺社があるなら景観もよく観光スポットのような町なのではないか」という予測をたてて調査をおこなった。

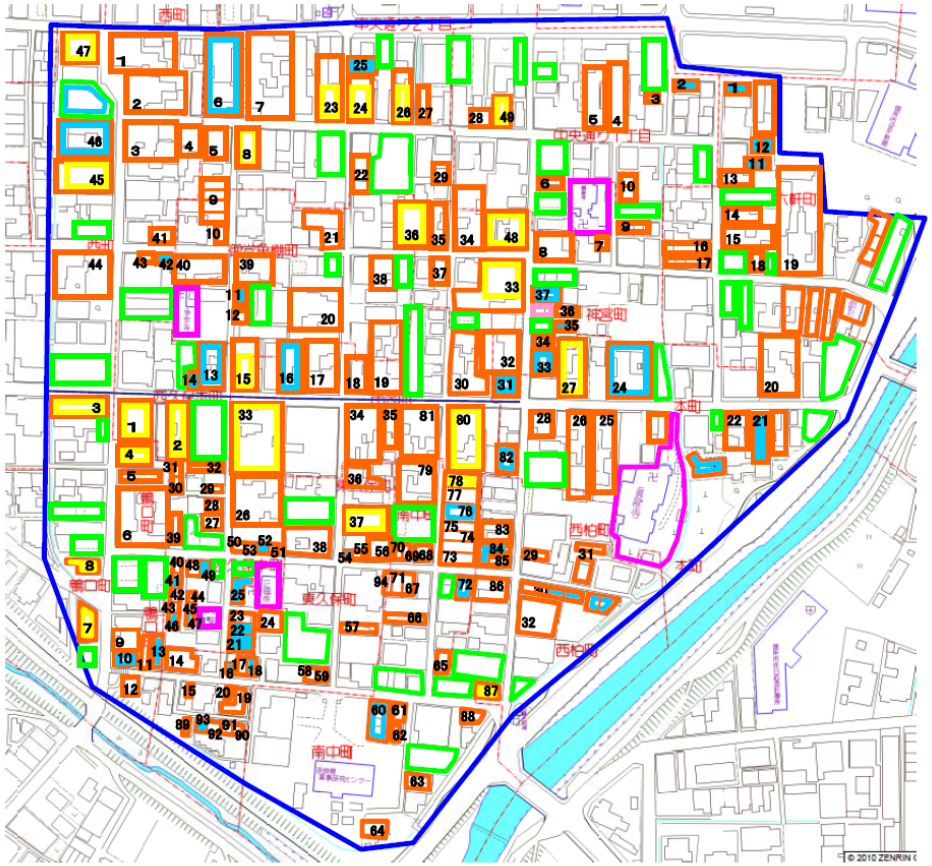
東御所の特徴は全体では、数値にも出ているように空き地が多い。西御所が１班 16 件、２班 20 件、17 件、であるのに対し東御所は 24 件ある。もともと西御所は商業が盛んであったため、割と賑わっているようだが東御所はとても静かな雰囲気だった。町家も並んでいるところは 5 件以上並んでおり、とても趣ある町並みに見えたが一旦途切れるともう誰も住んでいない空き家や空き家が潰された後の空き地、ガレージなどが目立っていた。

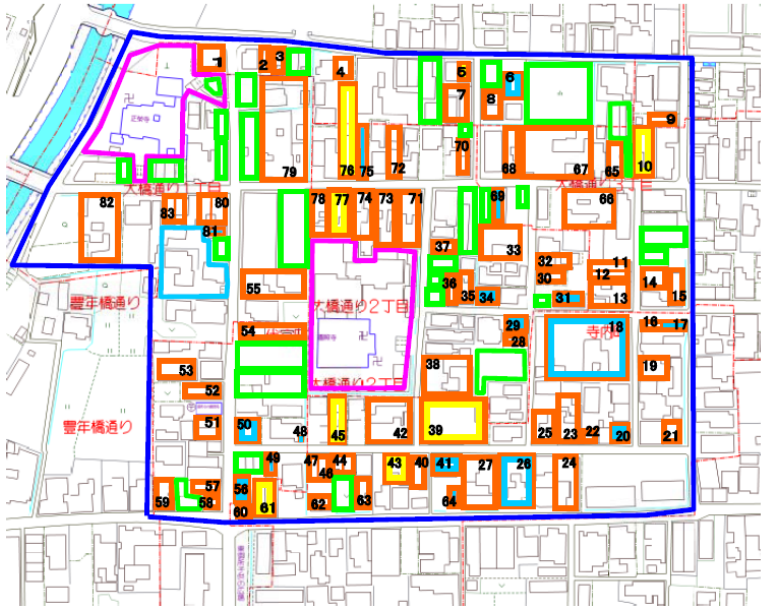
次に通りごとに詳しく見ていく。まず、大橋通り一丁目から三丁目にかけては印象として町家が多いイメージがあった。景観も趣があってまさに奈良の古い町並みが見られた感じがした。しかし、ところどころに新しく建てられた家があり、それがすごく現代に引き戻されるものであって残念だった。

大橋通二丁目は寺社が大部分を占めており、隠れた名所という感じがした。楠さんが寺社の説明もしてくれたのでとても楽しく、寺社の中も見たいと感じた。寺内町は空き家が目立った。町家と判定できても状態が悪かったり、人が住んでいなくて崩れている空き家などが印象的だった。代官町は割と昔の造りの家が多かった。入り口が狭かったり、２階の高さがなかったり、普段ではもう見ることのなくなったような家が並んでいた。

私個人の意見としては、寺社周辺は人もたくさんいて気軽にしゃべりかけてくれりしたし、町並みも趣があって歩いているのが楽しかった。（真下瑞穂）

２０１０．１１．３０　県立大学　小松原ゼミ　悉皆調査





町家
空家
町家商売
空地（駐車場）
社寺

平成22年度　御所まち悉皆調査　集計表

奈良県
平成22年11月28日 実施

班	地区分類	地区名	自治会軒数	自治会軒数 計	実測軒数	実測軒数計	町家数	空家数	町家商売数	空地数	社寺	備考
1班	西御所	西町	31	208	21	102	11	2	3	4	0	
		中央通り2丁目	30		29		11	2	3	3	0	
		中央通り1丁目	24		6		2	0	1	2	0	
		御堂魚棚町	32		23		10	1	0	3	1	
		神宮町	27		9		7	0	1	1	0	
		西久保本町	30		4		2	2	0	1	0	
		中本町	13		9		6	1	1	2	0	
		本町	21		1		1	1	0	0	0	
2班	西御所	鴨口町	24	177	24	168	5	2	4	5	0	
		西久保本町	30		50		17	18	2	6	2	
		東久保	30		36		15	5	1	2	0	
		中本町	13		5		3	2	0	0	0	
		南中町	34		37		14	5	2	6	0	
		本町	21		3		0	1	0	0	0	
		西柏町	25		13		4	2	0	1	0	
3班	西御所	中央通り1丁目	24	122	30	151	8	1	0	4	0	
		六軒町	25		37		12	5	0	5	0	
		神宮町	27		25		9	4	0	2	2	
		本町	21		37		11	6	1	5	1	
		西柏町	25		22		6	4	0	1	0	
4班	東御所	大橋通り1丁目	22	356	18	166	7	0	1	5	1	
		大橋通り2丁目	32		27		20	4	2	6	1	
		大橋通り3丁目	30		20		11	1	2	4	0	
		寺内町	95		52		26	6	4	1	0	
		代官町	25		28		11	4	1	3	0	
		旭町	38		16		8	1	1	5	0	
		御門町	114		5		1	0	0	0	0	
					587	587	238	80	30	77	8	

テーマ	御所まちなみ悉皆調査		
日時	2010 年 11 月 28 日（日）	場所	御所市商工会議所ほか

① ＪＲ御所駅待合室での打合せ

② 公共掲示板に貼られた調査協力依頼

③ 学生と地元の方と一緒に調査活動

④ 調査メモと集計表ほか

⑤ 調査結果の集計作業

⑥ 調査結果を踏まえての意見交換

第２章　歴史的町並み保存研究の考察と課題　　東帆奈美

はじめに

今や全国各地どこの地域でも行われていると言っても過言ではない町並み保存・まちづくり。各地域の特色を活かし、行政、NPO、市民、様々な人々が自分たちの住んでいる町、景観、文化を後世に伝え、他地域に PR しようと試行錯誤を繰り返している。

私は石川県の生まれで、子供のころから武家屋敷をながめ、格子の町並みを歩き、歴史的町並みを身近に感じ生活してきた。そして大学に入り、地域の勉強をするようになり、歴史的町並みがいかに素晴らしく価値のあるものかを知った。ただそこに格子や土蔵の家を並べるだけでは町並みにはならない。その地域、その家に歴史があり、住んでいる人の心にいつまでも変わらず残る町並みを残すべきだと思う。そして奈良の大学に進学し、ゼミ活動に参加するようになり、奈良にもたくさんの歴史的街並みが存在していることを知り、どの地域も抱えている問題や悩みがあることがわかった。

特に活動に参加し、NPO の方と共に活動を行ったのは奈良県御所市のごせまちだ。ごせまちでは中世から続く町家が今も変わらず建っている。伊勢街道、高野街道などの交通の要所として栄え、江戸期から昭和期にかけて建てられた町家が多く存在する。寛保２年の町並みの地図と見比べても、町並みがほとんど変わっておらず。江戸からの町並みそのままを残す歴史あるまちだ。しかし近年町家を壊し新しい家に建て替えたり、町家から移動し別の場所で新しい家を建てたりする人が増え、御所の町並みが消えつつある。

初めて御所の活動に参加し、ごせまちを訪れたときは、一軒一軒家を歩き町家の数を調査した。どの町家にも風格があり立派で、どこかの時代にタイムスリップしたような感覚になった。その感覚がとても懐かしく、石川を思い出させるような町並みが並んでいた。しかし歩いて素晴らしさを感じると同時に、廃墟のような町家があったり、まさに町家が取り壊される瞬間をみたり、ごせまちが抱えている現状、問題も見えてきた。重要的建造物保存地区群の登録をせずに町並み保存を行っている。奈良県御所市の町並み保存活動に参加して、現地の状況や、住民の方、NPO の方の問題や悩みを聞いているうちに、日本全国の歴史的町並み保存を行っている地域では同じような問題が起こっていないのか。もしくは、起こっていたとして、どのような方法でピンチを切り抜けたのか。と思うようになった。そこで、全国各地で行われている町並み保存の事例と論文を 1.どのような視点視角からとらえているか。２.どのような地域を対象としているか、またその地域の特徴。３.どのようなことが明らかになったか。この３つの視点から分析し、御所に通じるものがあるのではないか、問題解決のひとつの糸口になるのではないかと思い、調べてみた。

１．町並み保存研究の視点・視角の傾向

（１）町並み保存・まちづくりの基礎概念

まちづくりは結果ではなくプロセスである。まちづくりの進め方は各地域それぞれに方

法があり、多様であるが、（佐藤 2002．52 頁）それでは、近年各地で活動活発な「まちづくり」。今では当たり前のように「まちづくり」という言葉を使っているが、根本を見直したとき、果たして「まちづくり」とはいったいどのようなことを指しているのか、どのようなことが「まちづくり」なのかだろうか（佐藤 2002．2 頁）。まちづくりを支える人や組織の仕組み・体制のデザインをどのように行っていくべきなのだろうか（佐藤 2002．36 頁）。

日本で独自に発展してきたまちづくり。どのようにしてまちづくりが行われてきたか、まちづくりの歴史と流れを明らかにし、（佐藤 2002．12 頁）。そして、町並み保全が学問上でどの位置にあるのか、歴史的環境にどのような価値があるのか、４つの価値から町並み保全の研究の必要性を論じている（島村 1982．397 頁）。

（２）全国で行われている多様な町並み保存活動

各地での町並み保存活動は各地域の特色を活かした物が多く、町並み保存活動の課題としてよく挙げられるのが、行政と民間・住民の協力による町づくりである。香取市佐原では官民が協力して町づくりを行っている。そこから発展する町並み保存活動について述べている（香取市都市計画課 2008．14 頁）。という、官民一体となった保存活動や、明治以降北陸地域の産業は後退していき、太平洋側に工業の中心が置かれている今日。しかし在来工業を利用した町づくりが行われている。建物ではなく工業を利用した町づくり（須山 2008．205 頁）。という実際にその地域が培ってきた技術を用いて行うまちづくりや、重伝建地区に指定されたまちなみを、武家町・城下町の視点から挙げてあり、それぞれの町並みの特徴を示している（河合 2002．184 頁）。という近世の町並みを保存し後世に残すために行っている保存活動。さらには、山間地域の人々の暮らしは変化している。過疎化・高齢化が進み、空家や耕作放棄地が増え、集落の維持すら困難になりつつある。多くの山間地集落が抱えている共通の課題である。そんな山間地域の人々の町づくり、産業づくりの事例（山中 2008．173 - 174）。 一言でまちづくりと言っても、様々なやり方、作り方がある。この論文では大学と共同で行ったまちづくりの例である。どのように大学と連携しまちづくりを行ったかが示されている（脇田 2002．82 頁）。などそれぞれの地域の本来持っている物・ネットワーク・文化を活かし保存活動は行われている。

（３）それぞれの地域が抱えている問題点

しかし、実際そこに住んでいる住民の意識が、全員が全員同じ方向に向いているわけではない。制度や補助金、様々な問題が絡んでくる。近年各地で多くの自治体が歴史的町並みの保存を行っている。その各自治体がとっている制度、主に補助金が町並み保存に対し、どのような影響を与えているか。同時に、補助金が住民意識にどのように影響を与えているか（前田・西村．1994．473 項）。さらには住民が保存活動に対しどのような意識を持っているかがかなり重要な問題となってくる。

住民の意識に関する調査研究は数多く行われており、各地域により様々な調査方法がある。例えば、岡山県内の町並み保存地区と観光に関する研究を発展させるため、住民の視

点に焦点を当て、真庭市勝山地区の保存活動を検討し、その課題を究明する。このために、岡山県の町並み保存政策の実態を把握し、岡山県庁、旧勝山町役場、勝山町町並み保存地区の居住者にアンケート調査を行った（羅・市南 2007．142 頁）。や、重伝建地区に指定された保存地区の例として今井町と、現代の町並み保存・再生の例として空堀商店街界隈を取り上げ、〈歴史的環境〉を捉える両者の「まなざし」の差異がどこから生じるのか。〈歴史的環境〉に対する空堀商店街界隈の活動を位置づけることにより、新しい保存形態として、活動の特徴を捉えることが可能ではないかと考える（柴田 2005．194 頁）。や、金沢市三茶屋街の全居住世帯を対象とする調査票を用いた留置き自記式調査により、居住世帯の町並み・住環境・観光に対する意識の違いを、町並み景観保全施策開始以前・以後の来住世帯間で比較し、町並み景観保全施策の社会的影響について研究する（小林・川上・倉根・西澤 2002．955 頁）。現在の茶屋町の地図、文化８(1811)年の町割の地図、文政３(1820)年の茶屋町創立の地図を載せ、どのように街が変わったか、あるいは変わっていないかを地図で比較し、説明している（川上 2008．17 頁）。などがある。それぞれの地域において、周辺の住宅地化と生活様式の変化に伴って、歴史的街並みが失われつつある。そんな中、住民の町並み保存に対する意識の変化を過去の調査結果と対応させながら明らかにしている（叶内・高橋・尾鍋 1980．147 頁）。

これまで町並み保存事業の研究には、地区内外の住民の意向を捉える研究として町並み保存に対する意識を「町並み保存への賛意」と捉えた研究がある。しかしこれからは伝建地区制度の理解や指定後の保存活動への参加の意向など、町並み保存の意識を測る指標のさらなる検討が求められている。町並み保存意識は伝建地区制度の認知度、保存活動への参加意識、地区指定範囲の拡大への賛意、の３点にあらわれると仮定し、伝建地区内外の住民の意向を明らかにしている（吉田・上村・宇高．2007．89 項）。

２．町並み保存研究の対象とする地域の特徴

（１）全国の町並み保存の地域別の特徴、西日本編

歴史的町並みを保存する活動は全国で行われており、それぞれの地域により特徴がある。まずは関西地区の特徴を見てみる。

奈良県奈良市の旧市街地に位置する奈良町を対象としている。奈良町は元興寺旧境内を中心とした地域を奈良町と呼んでいる。狭い街路に江戸時代以降の町家が数多く並ぶ歴史的町並みが形成されている。奈良町の建築物と、そこに住む住民に対し、ヒアリング、アンケート調査を行っている（前田・西村．1994．473 項）。同じ奈良県で南部の重要伝統的建造物群保存地区に指定された奈良県橿原市今井町と大阪市中央区空堀商店街界隈を対象とし、〈歴史的環境〉を持ち、保存という点で共通している二つの場所を比較し、保存活動の違いを明らかにする（柴田 2005．195 - 197 頁）。今井町はかつて「大和の金は今井に七分」といわれるほど繁栄した町で、中世戦国時代の環濠集落を発祥とする、称念寺を中心とした寺内町。現在も江戸時代の姿を残している。空堀商店街界隈は大阪中央区に位置し、

都心にもかかわらず、第２次大戦の戦災にもあわず、戦前からの土地の勾配を活かした長屋の町並みが残っている珍しい地域である。他にも神戸市真野地区を事例として上げている。1960 年代後半から公害追放運動に端を発したまちづくり運動が取り組まれている（佐藤 2002．36 頁）。30 年間にわたって住民主体の町づくりをおこなってきた真野地区。商店街と住宅と工場が密接した典型的な下町地区で、長屋の老朽化が進み、震災による家屋の倒壊、火災の危険性は決して低くはなかった。しかし、まちづくり活動で培われた“人と人とのつながり”が功を奏し、住民のバケツリレーや地域の企業による消火活動により、消失を最小限にとどめることができた。真野地区の初動対応は全国から注目をあびた。

次に北陸地域の特徴を見てみる。石川県金沢市三軒茶屋街を対象とする。理由は十数年にわたる町並み景観保全施策の実績があり、また居住世帯の大きな変動が見られるため（小林・川上・倉根・西澤 2002．955 頁）。金沢市は小京都と呼ばれ、加賀百万石の城下町の風情を現代にとどめており、主に江戸時代の町家や武家屋敷が多く残されている都市である。特にひがし茶屋街は金沢に残っている茶屋街の中でも規模が大きく、代表的な地区で観光地となっているのと同時に一般市民の方も住んでいる。他にも同じ北陸地方。なかでも、石川県輪島市と富山県井波町を対象としている（須山 2008．208 頁）。輪島市黒島地区は日本海航路による海運業の発展の中で北前船の船主、船員の居住地として栄え、江戸期から明治中期にかけ全盛を極めた地区である。富山県井波町は瑞泉寺の門前町として栄え、600 余年の歴史がある。井波彫刻が有名で、彫刻業者を門前町の空き店舗に誘致し、築 100 年を経た商家の中で木を刻む職人の姿が垣間見える街路を形成した（須山 2008．208 頁）。

次に中国地方の特徴を見てみる。岡山県真庭市勝山地区。旭川に面し、作西の政治・経済・交通・文化の中心地として知られ、出雲街道の要衝の地でもある（羅・市南 2007．143 頁）。古くから出雲街道の要所として栄え、現在でも連子格子の白壁や土蔵が立ち並ぶ。「のれんのまち」としても有名で、各家の軒先にはそれぞれ違った色とりどりの暖簾がかけられており、見る人を楽しませている。他にも安芸の小京都と呼ばれる広島県竹原を対象とし、地区内外の住民に対しアンケート調査を行っている（吉田・上村・宇高．2007．89 項）。室町から戦国時代は竹原小早川氏の、江戸期以降は広島藩の領地として発展した。主に塩田を中心とした製塩の輸送の拠点として栄え、塩の産業に関する産業で富を得た豪商の屋敷や商家が立ち並ぶ豪勢な町並みとなっている。さらに島根県松江市を対象としている。城下町としての歴史を持ち、戦争による被害も少なく、近世の城下町の形態をいまに残している。島根大学、島根女子短期大学の教員・学生が参加し、「まちかど研究室」を開設。多様なまちづくりに関する教育・研究・社会活動を実践している（脇田 2002．82 頁）。

次に九州地方の特色を見てみる。山口県萩市を対象としている。萩市には４つの重伝建地区があり、堀内地区（武家町）平安古地区（武家町）浜崎地区（港町）佐々並一地区（宿場町）を対象としている（大槻 2012 20 頁）。毛利家の城下町であった萩は、その後明治維新の胎動の地として吉田松陰、高杉晋作、伊藤博文などを輩出した地として知られる。明

治期の町並みをそのまま残し、まるでタイムスリップしたかのような町並みが広がっている。

（２）全国の町並み保存の特徴、東日本編

次に東日本の特徴を見てみる。千葉県北東部にある佐原はかつて「小江戸」と呼ばれた商業都市である。しかし郊外型店舗の進出が始まり、客が外へ流れるようになり、商圏の縮小が顕著になると、地域活性化の方策を模索するようになってきた（香取市都市計画課 2008．13 頁）。木造りや蔵造りの町家の他、土蔵、洋風建築などの伝統的な建物が数多く残り、利根川下流域の商業都市としての歴史的背景がある。さらには伊能忠敬ゆかりの地として旧居もあり、「小江戸」として昔の風情をいまに残している。他に、愛知県名古屋市南郊に位置する有松町。旧東海道筋の落屋集落として、また、「有松絞」の産地として栄えた（叶内・高橋・尾鍋 1980．148 頁）。旧東海道の鳴海宿と池鯉鮒宿の間宿としてつくられた。絞り染めとともに発展し、天明 4 年の大災以降、旧街道沿いの町家は瓦に改め、塗篭作りにしたことから現在のような豪勢な商家が立ち並ぶ町並みとなった。さらには北海道函館を対象としている。蝦夷地と呼ばれた北海道独自の文化が町並みにも現れている（村岡 2005．52 頁）。明治末期から昭和期にかけて和洋折衷の建物が多く並ぶ。行政・文化・としての中心性や各宗派の教会など外国文化の影響を受けた公共施設が並び、歴史的町並みを残している。

その他にも全国各地で行われている町並み保存の特徴として挙げられるのは、城下町を起源としており、その町並みを保存するというもの。山口県萩市、鹿児島県知覧町、秋田県角館町、青森県弘前市、福岡県甘木市を対象としている。どの地域も武家町・城下町の町並みを有しており、重伝建地区に指定されている（河合 2002．182 頁）。

３．町並み保存研究を整理し明らかになったこと

（１）町並み保存の起源

町並み保全は歴史学と建築学の接線上に提起されている都市研究課題である。取り扱う対象そのものが歴史的建築物ないし環境であり、かかるテーマが社会的に要求されている建築学史における現代性である。歴史的環境には①建築的価値②住空間敵価値③住環境的価値④都市環境的価値がある。都市全般にわたる歴史的環境の諸方面からの現状把握とこれの活用計画が大きな都市研究課題となっている（島村 1982．401‐408）。まず、一般に言われる町並み保存、まちづくりの定義とはなにか。まちづくりとは何か。まちづくりの定義と 10 の原則を示し、それを踏まえた上で、まちづくりの活動が目指す共通の目標を明らかにしている（佐藤 2002．3‐7 頁）。そして、歴史的な町並み保存活動がなぜ行われるようになったのか。もともとはヨーロッパで始まったもので、日本はその数年あとにはじまっている。「地域おこし」運動からのまちづくり、歴史的な町並み保存運動の現在までの流れを明らかにしている（佐藤 2002．20 頁）。さらにはまちづくりの体制・組織を図でわかりやすく示してあり、体制のイメージモデルが４つ明らかにされている。そして、まち

づくりには支援が必要で、その支援の仕組みと支援プログラムの例を表にして明らかにしている（佐藤 2002．37‐45 頁）。そして具体的に進めていく中でタイプが分かれてくる。まちづくりの進め方として４つに分類できる。１課題解決突破型、２プログラム進行形、３コミュニティづくり型、４まちづくり支援組織型。まちづくりの起動・組織の立ち上げ・試行・実践・検討などまちづくりの具体的な流れを明らかにしている（佐藤 2002．52‐57 頁）。

（２）保存活動においての住民の意識の重要性

町並み保存活動において問題点として上がってくる要因の一つは、実際に町並み保存を行う対象の民家に住んでいる住民の意識の問題だ。住民活動から始まった町並み保存は、地域資源である歴史的な町並みを活用し、いかに町づくりを進めるかを主眼としている。町並み保存の開始時から、住民と行政は同じ目標を見据えて協同し現在に至っている。互を尊重する精神と補完しあって事に当たる体制、課題や問題に対応する意識の共有がその背景にあると思われる。そして、大学を加えた官民学協同の必要性と協同意識が芽生えてきた。大学生対象のプロポーザルとコンペティションを開催し、受身の行政、住民に対するプレゼンでも発表会でもなく、実現を目的とし、経費・デザイン・景観・採算性など、バランスのとれた提案を求めている。学生提案は NPO が案内地図の作成を、市が施設等を２件修景することで実現している。そして、空き地・空き店舗の解消として、大学生による実験店舗などが行われ予想外の反響があった（香取市都市計画課 2008．15 頁）。とあるように住民の意識がまっすぐひとつの方向に向いていると比較的保存活動はうまくいき、地域感のコミュニケーションもうまくいく。

しかし、すべての地域がそうとはいかないのが現状だ。地区内の回答者自身の属性（続柄、性別、年齢、職業、所属自治会）と回答者の住宅の属性（所有形態、住居年数、建物の用途）別に町並み保存の意識の差異を明らかにしている。地区内と地区外では意識に大きな差があることが明らかにされており、地区外の住民の意向を測ることが地区指定後の住民活動をより活発化するといえる。より広範囲に、そして正確にコミュニティの社会関係を知ることが重要であるとされている（吉田・上村・宇高．2007．95 項）。とあるように、意識がばらついていてはその地域がひとつになることはない。その中には様々な思いがある。

まず、補助金の問題。対象地区の居住者を①補助金申請者②補助金申請を途中で断念した断念者③補助金未申請者に分類し、ヒアリング・アンケート調査を行った。①②からは補助金制度の全体的評価は高いが、補助金の金額に対しては評価が低い。③からは補助金の制度は知っているが、内容を把握している人が少ない。補助金制度が施行され、それを利用した建物ができることによって関心をよび、利用を促す効果―モデル効果―がある。制度、関心を向上させるには、改修時のデザインの向上、補助金の増額、補助金交付対象の範囲拡大が課題にあげられる（前田・西村．1994．476 項）。一言で補助金と言っても、額、使うことのできる範囲など様々な制約がかかり、思うように使うことができないのが

現状だ。

次に後継者の問題。現在住んでいる住宅の将来について「子供の意志に任せる」というのが半数以上を占め、今後町並み保存を発展していく上で若い世代の意識が大きな影響力を持つことが明らかになった。前回の調査から、二十歳代層においても半数強が「伝統的な和風住宅」を志向していることが明らかとなっており、若い世代にも伝統的なものを守っていこうとする意志が見られる。住民全体の町並み保存に対する意識は年々高まっており、建物は「外観だけ古い姿で残し内部を使いやすく改造する」という保存方法を多くの住民が支持しており、また、古い建物を「資料館や民族館のようなものとして」残すことよりも、「ほぼ現状通り、主として住宅として」保ちつづけていくことを望んでいるというのが有松町における住民の意識である。そのためには住民の自力だけでは発展は難しく、今後、県市町村の積極的な取り組みが必要とされている（叶内・高橋・尾鍋 1980．150-155 頁）。都会へ出て行った息子・孫達が戻ってこず、高齢化していき、誰もいなくなり廃墟と化していった町家は無数にある。とてももったいない事実だ。

最後に規制の問題。〈歴史的環境〉とは、我々を取り囲んでいる社会的・文化的に作られてきた環境の中で、とくに長期間にわたって残ることにより、一定の価値を持つとみなされるようになったもののことを呼ぶ。この〈歴史的環境〉保存制度の経過、先行研究を明らかにし、二つの地域を比較。〈歴史的環境〉の保存には今井町のように外観補修による歴史的なものを守る方向と、空堀商店街界隈の長屋改修による再生を目指したものとがある。今井町は景観を保存、空堀商店街界隈は人が住むことによる長屋暮らしの保存を目指している。空堀界隈の場合は〈歴史的環境〉の共有化ができていない分規制がなく、自由に改変可能である。今井町の住宅は保存地区に指定されたことにより、自分たちの家ではあるけれども、自己所有物ではない感覚になっている。空堀界隈のような長屋を住みやすく近代化しながら長屋本来のスタイルを変えることなく改修するやり方は新しい〈歴史的環境〉の再生となる（柴田 2005．200 頁）。よく目にするのが重要伝統的建造物群保存地区の指定。規制がかかり、自分の家なのに自由に改装、建て替えができなくなる。指定を受けたから良いことばかりではない。

一方で、重伝建の指定をうけたほうが良いという意見もある。今でこそ重伝建地区制度が町並み保存を行うにおいて一つの手段として定着したが、高度経済成長を背景に急激に失われつつあった歴史的町並みを、開発の波から守ろうとする動きから発した制度だ。町並み保存計画の策定にあたっては、必ず伝統的建造物群保存対策調査の実施が求められる。指定に至るまでには様々な調査があるのだが、この調査により、直接的には町並みを構成する町家などの、伝統的建造物群の文化財的価値が明らかにされることになる。しかし、それに留まらず、町並みの成立からこれまでの物語が解き明かされ、さらにはこれからの町並みの将来像までが描かれる。そして、この調査が現実の町並みを舞台に実施されることにより、単に調査を行った専門機関だけではなく、地区の住民や市民、行政の間で町並みにどのような魅力があり、町並みの過去から将来像までが共有されることになる。この

結果、「わがまちの魅力」に気づき、将来像を共有した新たな地域共同体が生まれ、町並み保存のまちづくりの原動力となっていく（大槻 2012.22頁）。

（３）観光としての町並み保存活動

このような問題点を突破して、その地域がもつ素晴らしい歴史ある有形遺産を残すため、みんなに知ってもらうため、“観光”という手段で町並み保存行っている地域が多くある。

北陸地方の各地には特徴的な伝統産業が存在し、バブル崩壊以降の不況からなかなか立ち直れないでいる。しかし、近年、各産地では在来工業と観光が結びついた新たな取り組みが見られるようになった。観光資源としての在来工業は一般的だが、それを具現化するには観光客を熟知した「演出」が重要になる。井波町では彫刻業者を古民家に誘致し、表の通りから彫っている姿が見えるように演出した。その結果、井波町には年間８０万人を超える観光客が訪れるようになった。在来工業と観光の組み合わせは地域の活性化にとって有効な方策を提示している（須山 2008．208‐209 頁）。さらに、高度経済成長の始まりとともに炭焼きや山の仕事がなくなり、東京オリンピック以降から都市に出稼ぎに出る人が増えた。マツクイムシの被害が拡大し、山の副業も衰退していき、人々の暮らしが立ちいかなくなっていった。こうした中、住民の意識の高まりとともに、行政と、住民が連携した動きがようやく目にみえたものとなってきた。そのひとつが「小さな産業づくり」である。紙作り、そば打ち体験、楮溶かしなど、「田舎の旬」の体験、「民泊」なども企画し、都市との交流・共生を図っている。体験ツアーや特産品の開発・販売にも力を入れている。揺れ動く社会の大波に翻弄されながら疲弊していく山間地域。こうした集落にとっての自前の「小さな産業づくり」は必要なことであり、それを維持継続していくためには住民の意識も然ることながら、行政の資金面・人的面での細やかな支援や地域外からの助言・協力が必要である（山中 2008．173‐175）。その土地から産まれた産業と、その地に古くからあり、人々の暮らしを支えてきた町並み、この二つを武器にして観光と保存を行っている。

そして、大学や、NPO などの団体との関わりとの中で保存活動を行っているところもある。岡山県の町並み保存事業の実態、真庭市勝山地区の現在までの変化を明らかにし、勝山地区を訪れた来訪者、勝山地区に住む居住者にアンケート調査を行った。年間来訪者数はさほど多くないにもかかわらず、来訪者の町並み全体に対する満足度は高い。来訪者・居住者ともに、町並み全体や、武家屋敷、酒造場、飲食店など個々の施設については満足度が高いことから町づくりの評判は良い。一方、居住者は「活発的な町並みづくり」の認識が意外に低い。住民の意見では若者の少なさの指摘などにより、町づくりの一体感がやや欠けている。住民をいかに結集して誇りある町づくりを持続し続けることが出来るかどうかが課題となる。住民相互の連携、情報の共有、住民・保存団体・行政の協力関係を発展させることが必要となってくる（羅・市南 2007．148 頁）。他にも、まちかど研究室を軸にし、地域とあまり関わりのなかった大学の有する知識が地域に還元されるようになった。大学・地域・行政の関わりが生まれ、そこから実践し、さらに広がりをみせる。大学

と提携したまちづくりの成功例を明らかにしている（脇田 2002．83 - 85 頁）。

保存され、観光地にすることにより、訪れた人はもちろん要点を抑えて観て回ることができる。三軒茶屋街に住む全世帯を対象に調査票を用いた留置き自記式調査を実施した。結果、居住世帯の過半数を戦後来住世帯が占め、世帯の主たる就業者の就業地は地区外就業が多いことが明らかになった。これは茶屋街にとって新しいライフスタイルである。町並み景観保全施策開始後に来住した世帯は、開始前来住世帯よりも町並み景観保全、観光、伝統文化の振興、住環境整備に対して肯定的である。地図を比較すると、町割り・間口の方向・神社など現在と比べると変化が見られず、昔の地図を持って茶屋町を歩いても迷うことなく目的地にたどり着ける。昭和 50 年の文化財保護法の改正により、伝建地区の第 1 号を目指していた。しかしすでに住宅地としての性格が広がってきており、当時は茶屋街としての歴史に懸念を持つ住民も多く、強い反対があった。その後文化財行政ではなく、観光行政により対応がなされ、現在の歴史的な町並みの保全が保たれている（川上 2008．18 頁）。

どんなに名の知れた観光地でも住民の思い、歴史が積み重なって今がある。函館といえば何もしなくても外からお客さんが来て、町が賑やかになっているイメージだったが、その裏には様々な試行錯誤の繰り返しが行われていた。その試行錯誤があったから、私の知っている函館が成り立っている。函館で行われた町並み保存の活動について、その時の住民たちの動き・気持ちなどを話してある。様々な活動が一色ではなく、何色にも塗り重ねられて、今の函館が出来上がっている（村岡 2005．52 - 75 頁）。

まとめ

全国各地で行われている町並み保存活動には、それぞれの地域特有の保存の方法があることがわかった。その地域が最終的に何を目指しているのか、どんなことを目標に保存活動を行っているのかにより、保存の手段・形態・問題点が違ってくる。例えば観光。観光地にして外部から収益を得て、外部の人にこんなに素晴らしいところがあるということを PR し、保存活動の糧としていく。収益も得ることができ、観光客が来ることにより、賑やかな町を作ることができる。しかし観光地になるにあたって一番重要なのが、住民の方の理解だ。少なくとも以前よりはプライベートがなくなり、家の写真をインターネットで記載されたりする可能性もでてくる。そのことを踏まえた上でも、その町を観光地とし、保存活動を行うという住民の理解が必要だ。観光にかかわらずとも、住民の意識というのは保存活動において、重要な位置にある、ということがわかった。全国の保存活動の事例の中でも住民の意識調査を行っていないところはないと言えるくらい、どの地域でも行われている。

全国の町並み保存の事例を整理し、御所の抱えている問題（廃屋がある。家を出ていく若者が増え、町家に住む人が高齢化してゆき、だんだんと空家となっていく。住民の意識。）の解決の糸口となるものがあるのかどこまでわかったか。

歴史的町並みそのほとんどが観光地となっていて、外部からの収益を得ているところが多い。そして重要伝統的建造物保存地区郡に登録されており、補助金が出ている。金沢市ひがし茶屋街や、京都の街のように古くからその土地が観光地で、年を追うごとに保存活動が見直され現在に至るという地域では住民の意識の中に観光地だという概念がしっかりできており、観光地としての保存活動を行うことに対して抵抗がない。しかし岡山県勝山地区のように観光地としては栄えてきておらず、近年観光地として保存を始めた地域ではごせまちと同じように住民の意識の相違が問題となっている。意識調査にすら非協力的な人が多い。

廃墟と化している町家に関しては、尾道や福岡県糸島市で空家を大学生と地元の大工さんで再生するというプロジェクトが行われている。地域と大学との関連を密に行うことで、最新の研究成果が情報として入ってくる。さらにお金はないが、時間とやる気だけは持て余すほどあるという大学生の特徴を最大限に活かし、活動に参加してもらうことで、古く堅い意見だけではなく、新しく斬新な意見を得ることができる。ごせまちでもこのような取り組みを行ってみてはどうかと思う。もちろん一筋縄ではいかないことはわかっている。お金の問題もあり、どういうふうに呼びかけを行うのかという問題もある。しかし、じっとただそこに待っているだけでは何も起こらない。全国の軌道にのっている保存活動に共通して言えることは、キーとなる人間がいて、その人を含め、周りの人が動き続けているということだ。アクションを起こして、周りを巻き込んで、進んでいくことが成功の鍵と言える。

今後取り組みたい課題は、寛保２年の町家の地図がごせまちにはある。その江戸期の地図と昨年作成した町家の地図をベースに明治、大正、昭和、現在の町家の地図を聞き込み調査など行い、作成し、地図を通して、町並みの変化をみてみたい。そして、住民の方に調査をし、そこに住んでいる人、住んでいた人の家族構成の変化を地図に示す。そこからなぜ町屋が減っているのか、原因が解明するかもしれない。地図を通して町並み保存を進めていく手がかりとなる研究を行っていきたい。

参考参照文献の一覧

香取市都市計画課 2008. 特集町並み保存と地図. 香取市佐原伝統的建造物群保存地区. 地図情報通巻第 104 号. Vol.27. No.4. 13 - 15

叶内米子・高橋啓子・尾鍋昭彦 1980. 歴史的町並み保全の可能性について - 有松町における調査事例 - . 聖徳学園女子短期大学紀要６. 147 - 155.

河合淳 2002. 武家町・城下町.「日本伝統の町」 - 重要伝統的建造物群保存地区 62 - . 182 - 204. 東京書籍.

川上光彦 2008. 特集町並み保存と地図・金沢市ひがし茶屋街. 地図情報通巻第 104 号. Vol.27. No.4. 16 - 18

小林史彦・川上光彦・倉根明徳・西澤暢茂 2002. 金沢市三軒茶屋街における居住世帯の特徴と町並み・住環境・観光に対する意識の関係. 日本都市計画学会学術研究論文集第 37 巻. 都市計画. 別冊、都市計画論文集. 955 - 960.

佐藤滋 2002. まちづくりとは何か - その原理と目標. 日本建築学会編『まちづくりの方法』[第 1 巻] 2 - 11. 丸善株式会社.

佐藤滋 2002.「まちづくり」の生成とその歴史. 日本建築学会編『まちづくりの方法』[第 1 巻] 12 - 35. 丸善株式会社.

佐藤滋 2002. まちづくりの布陣 - まちづくりの体制のデザイン - . 日本建築学会編『まちづくりの方法』[第 1 巻] 36 - 45. 丸善株式会社.

佐藤滋 2002. まちづくりのプロセスをデザインする. 日本建築学会編『まちづくりの方法』[第 1 巻] 52 - 57. 丸善株式会社.

島村昇 1982. 町並み保全と都市研究. 豊田武・原田伴彦・矢守一彦編著. 講座・日本の封建都市. 第 1 巻. 397 - 409

柴田和子 2005. 歴史的環境の保存と保全 - 今井町と空堀商店街界隈の町並み保存に対する意識を中心に - . 龍谷大学国際社会文化研究所紀要. 第 7 号. 193 - 201.

須山聡 2008. 北陸 - 「裏日本」化と環日本海交流. 竹内敦彦編著『日本経済地理読本』[第 8 版] 205 - 213. 東洋経済新報社.

前田博子・西村一郎. 1994. 町並み保存研究と居住者意識に関する研究 - 歴史的町並みを有する奈良町における事例を通して - 日本建築学会中国支部研究報告書第１８巻

村岡武司 2005. 函館 - 歴史的建築物の再生がまちに生命を与える - 西村幸夫・埒正浩編「証言・町並み保存」51 - 74. 学芸出版.

山中進 2008. 南九州 - 新幹線全線開業への期待と山間地. 竹内敦彦編著『日本経済地理読本』[第 8 版] 167 - 175. 東洋経済新報社.

吉田倫子・上村信行・宇高雄志. 2007・8 月. 町並み保存地区内外の住民の町並み保存に対する意識の差異 - 竹原重要伝統的建築物群保存地区を事例として - . 日本建築学会計画系論文集第 68 号. 89 - 96.

羅燕娟・市南文一 2007. 岡山県真庭市勝山地区の町並み保存活動とその課題. 岡山大学環境理工学部研究報告第 12 巻. 第 1 号. 141 - 149.

脇田祥尚 2002. まちづくりの学び方. 事例 6 松江市「まちかど研究室」 - 大学と街の連携 - . 日本建築学会編『まちづくりの方法』[第 1 巻] 82 - 85. 丸善株式会社.

第３章　地域振興にかんする先行事例の分析と御所まちへの適応可能性

石川敬之　鴻池裕香　辻　賢

１．はじめに

本章では、御所まちの地域活性化について、その基本的な方向性を得ることを目的とした検討を行う。具体的には、今日の日本各地で行われている地域振興、まちづくりに関する文献レビューを行い、その実践の内容を整理する。およそ２０におよぶ地域振興の事例を対象とし、それらを４つに分類したうえで、御所まちの地域振興を考えるための視点を検討する。ここで言う４つの分類は、①環境問題型、 ②景観問題型、 ③産業衰退型(①第一次産業，②第二次産業)、 ④人口問題型である。「環境問題型」とは、都市化に伴う環境への影響、地方における自然環境の破壊等が問題となる地域での振興にあてはまるものである。「景観問題型」は、文字通り、地域における景観の破壊が問題となる地域でのものである。例えば、過疎化によって里山が荒廃したり、都市部でも、道路整備や高層マンションの建築などによって歴史的な遺産が壊されたりして伝統的な町並みがなくなったりした地域の振興がこの類型に当てはまる。「産業問題型」も、そのラベルが示すとおり、産業の衰退に伴って生じる問題に対応した地域の事例を類型化したものである。また、ここでは産業を第一次産業と第三次産業に分けて分析する。その理由は、二つの産業では、その問題のあり方と対応の仕方が変わるからである。第一次産業に関連する問題は、やはり地方においてより顕著にみられ、農林水産業の担い手の継承問題や地域の経済的問題、また上にあげた「景観問題」とも関連する複雑な問題になっている。一方、第三次産業に伴う問題としては、地方・都市に限らず、サービスの提供者がいなくなることで地域における人やものの流れが停滞し、それが地域のさらなる衰退を招くというものとなっている。「産業問題型」では、このそれぞれについて論じていきたいと思う。最後の「人口問題型」は、地域内の人口減少、例えば中山間地域の過疎化やコミュニティの少子高齢化が要因となる地域的問題への対応がまとめられたものになっている。

各カテゴリーラベルからも推察されるように、ここでの類型化は、その地域において存在していた問題に基づくものである。また、類型化のために用いた事例は、地域の振興の取り組みが詳細に論じられたものであるため、この類型化を通じては、それぞれの問題に、いかに対応していくのかということが帰納的に導き出せる。従って以下では、この４つのカテゴリーを導いた各事例の詳細な検討を通じて、地域振興への取り組みやそれがもたらした反応、そして最終的な成果について説明していく。この作業によってもたらされる知見は「御所まち」だけでなく、今後、各地の地域振興の実践において一定の指針的役割を果たすといえるだろう。問題の所在を明確に認識し、他の成功事例に見られる効果的な地域振興策の原理を知ることで自らの地域が取り得るべき手段もみえてくるといえる。地域の個別特徴に応じた調整も必要であるが、最初にとるべきイニシアティブの方向性について有意義な知識になると考えられるのである。

２．類型Ⅰ：「環境問題型」

（１）問題の所在

「環境問題型」カテゴリーは、生活空間の悪化や自然環境の破壊などが顕在化している地域を含むものである。今日、多くの地域において、こうした環境問題が存在し、地域の人々による取り組みがなされている。

環境問題という言葉が指し示す範囲は非常に広いため、人々は多様な活動を行っているように見えるが、実は、そこには一定の共通性、特に成功裡に終わる地域の活動には共通の行動原理や様式のようなものが確認できる。ここでは「環境問題型」カテゴリーを構成している各地域事例を検討し、環境問題に対する地域的取り組みに共通する要因を明らかにしていきたいと思う。

（２）環境問題型に対する活動の流れ

地域の環境問題の解決に成功した多くの地域で見られる最初の行動は「拠点づくり」である。この「拠点」とは、物理的な活動空間としての拠点もあれば、地域の人々が一緒に行動するきっかけとして場や活動を支える制度的拠点の設計であったりもする。例えば、地域の住民が継続して公園での活動を行う機会を作ったりすることも拠点作りの一つである。

こうした活動の重要な点は「全員で行うことの意義を感じる」という体験共有である。また、活動を通じて少しでも前進することができたという達成感を得るという意味もある。さらに、活動を行うことで自分たちの地域には環境に関する問題が存在するということをメッセージとして伝えることができ、それが他の住民のさらなる参加をもたらすことにもなっているのである。

では、そうした「拠点作り」としての初期活動がなされたあと、それに続いて取られる行動はどのようなものか。それは、専門家と連帯してさらなる環境保護活動を推進すること、そして地域におけるネットワークを作ることである。環境問題の解決には、地域住民の活動に加え、やはり専門的な知識が必要になる。問題解決に成功している地域では、この点が理解されており、実行に向けた行動が途切れなく続いていく。これが地域活性化に重要な意味を持っていると考えられる。また同時に、イベント的であった初期の地域活動を継続するためにネットワークの構築が進められるのも精工地域の特徴である。専門的知識と地域住民による主体的かつ継続的な活動を支える仕組みでもって地域の環境問題への取り組みがなされるのである。

（３）もたらされた結果

では、こうした活動は、どのような結果をもたらすのか。当然のことながら、地域における環境問題への適切な対応がなされることになる。実際、今回の分析で取り上げた各事例では、住民の活動によって環境の大幅な改善がなされていた。これは住民活動の動員を

うながす仕組みが作用したものと考えられる。また、もたらされた効果はこれだけではなく、環境問題の解決以外の成果ももたらされている。それは地域におけるコミュニティの再形成と住民の意識の変革である。多くの地域では、環境問題への取り組みを通じて住民間のつながりが強まっていった。環境問題という社会的関心がきっかけとなり、それまで接触のなかった世代間の相互交流がもたらされたところもあった。特に、学生と地域の様々な世代との関係が構築されたことは大きな成果であった。こうして新たなコミュニティが再構築されたのである。

また、多くの地域では、環境問題への取り組みを通じて、地域の各住民の意識が高まっていった。それは単に環境保全という問題だけでなく、自らの地域が有する価値の再認識でもあった。失われることによってはじめて気づく地域の良さというものを各世代が認識したのである。これは地域の将来に向けた持続的発展に対しても大きな意味を持つものになったのである。

３．類型Ⅱ：「景観問題型」

（１）問題の所在

続いて、地域の景観に関する「景観問題型」について検討する。「景観問題型」は、地域での景観の悪化が問題となるもので、自然環境や里山環境の荒廃、都市化に伴う町の風景の悪化、また歴史的遺産の破壊などが進む地域がこのカテゴリーに当てはまる。では、こうした問題に取り組み、成功を収めてきた地域では、どのような行動がみられたのか。

（２）地域の活動

今回、地域の景観問題に効果的に対応してきた地域の事例を検討したところ、ここでも「住民による問題の共有」が重要なポイントになっていた。具体的には、多くの地域で住民同士が継続的に集まる機会が作られ、地域のことについて話し合われたり、地域のことをあらためて知ってもらうためのイベントやワークショップなどが開催されたりするケースがあった。そして、こうしたことを通じて取り組むべき問題が整理され、それが実際の行動にもつながっていた。

（３）もたらされた結果

住民のそうした行動によってもたらされた結果は、漸次的ではあるが、地域の景観整備に向けた取り組みが継続性を持ってなされるようになったということである。その背後には、地域に住む住民が自らの地域の価値を再認識できたということがあったといえる。また、ツアーイベントやワークショップなどの開催は、地域外からの人々の参加機会と生み、そうした外部からの人々の視点は、地域内の人々に自らの地域の良さを再認識させるきっかけともなった。その意味でも、地域内に活動の拠点が作られることは大きな意味を持っ

ていたといえる。情報の発信、また情報交流の場が存在するということは、地域での活動を効果的に進ませるうえで重要な要因になることが明らかになったといえるのである。

４．類型Ⅲ：「産業衰退型」

地域と産業は極めて密接な関わりを持つ。地域での産業活動はその地域全体に大きな影響を与えている。「産業衰退型」としてカテゴライズされる地域問題は、地域内産業の衰退に伴って生じる複合的なものである。産業の衰退による経済活動の停滞や雇用の喪失、また人口の流出や地域文化の消失といったものがある。また、地域と産業との関係は当然産業の種類によって変わってくる。従って、産業の種類ごとに、その分析を行っていかなければならない。ここでは産業の分類を大まかに、農林水産業、製造業、サービス業として分類し、そのうえで、地域の活動努力が成果として現れやすい農林水産業（第一次産業）とサービス業（第三次産業）での地域振興について検討していくことにする。

（１）問題の所在（第一次産業）

産業の衰退は地域にとって深刻な問題である。それは経済活動の停滞とつながり、地域の衰退とそのまま直結するためである。産業衰退の要因は様々であり、そこには海外との競争、ライフスタイルの変化に伴う需要の低迷、また担い手不足などがある。ここで取り上げる第一次産業も、そうした産業衰退の要因と直結しており、特に地方においては大きな問題となっている。では、この第一次産業の衰退に伴う地域問題には、どのような対策が地域でなされているのか。

（２）地域での対策

第一次産業に依存する地域は多く存在する。そのため、その衰退に対する地域住民の関心も高い。そうしたなか、実際に行動に移し、また成功につながっていくケースには、次のような特徴が見て取れる。まず、衰退化しつつある産業の現状を理解し、従来のかたちに戻すというよりも新たな展開に向けて行動するという住民の姿が存在するということである。例えば、商品に付加価値をつけて商品としての魅力度を高めようとする努力がなされたり、消費者との接点を増やし、ニーズの把握に努めたりするような活動が行われている。また、現地に人を呼び込むような活動も多く確認され成果の出ているものもある。週末体験型観光の導入などは、その代表的なものである。これらは外部からの視点や人の流れなどを得ることで、それまでとは異なる産業のあり方を模索する動きであるといえるだろう。では、こうした活動はどのような成果を地域にもたらしたのか。

（３）もたらされた成果

従来の延長線上ではなく、新しい展開を志向した活動に取り組んだ地域では、成熟化が進む第一次産業の再活性化にとって大きな効果があった。商品に付加価値をつけることに

よって国内での新たな需要を開拓し、海外との価格競争に巻き込まれることが少なくなった。なかでも商品のブランド化に成功した地域では、さらなる経済効果を生み、またそのことは地域の自信にもなったといえる。

また、地域の外から多くの人に来てもらうことも地域に活力を呼び戻した。内部者の多くが忘れかけていた「自然を相手にしたものづくりのすばらしさ」を外部の人を通じて再発見することにつながり、事業従事者の力になっていった。そしてこれは新たな事業の担い手の獲得ともなった。地域内部では家業を継ぐもの、また外部からも新たな担い手が現れるというケースも生まれたのである。当然、これは当該産業が事業として成り立ち、生活の糧となりうる可能性を得たことと無関係ではない。安心して農林水産業に従事できる環境があってこそ人々も事業に就くことができる。それを作るきっかけを住民がつくったことに大きな意義があったといえるのである。それでは次に、第三次産業についてみていく。

５．類型Ⅲ：「産業衰退型（第三次産業）」

（１）問題の所在

産業のあり方は時代と共に変化するが、それに伴って地域の様相も変わってくる。特に、モータリゼーションの進展、情報通信の進化と普及、我々のライフスタイルの変化はサービス業のあり方を大きく変え、地域における人やものの流れにも変化を生んだ。そして、その進展にうまく適応できなかった地域は衰退していくことになった。産業と地域の問題は第一次産業の衰退のみに関わるものではないのである。

（２）地域の取り組み

では、第三次産業の衰退が問題となっている地域にとって、取り得るべき行動とはどのようなものであるのか。実際の各地の取り組みをみていくと、そこには一つの共通点がある。すなわちそれは、ここでも「人の流れを取り戻す」ための取り組みである。

かつて第三次産業によって栄えていた地域では、その再活性化策も、やはり対人サービス業としての第三次産業の復興であった。再び地域に人が戻ってくる流れを生み出そうとすることがそれぞれの地域でみられた動きであった。実際に採られたアクションはそれぞれの地域の特色を生かしたものとしてバリエーションに富んでいるが、そのなかで、敢えて分類をすると次のように整理できるだろう。

① 参加・体験型プログラムの実施

多くの地域でみられるのが、人々の参加を促す各種のイベントの実施である。例えば、地域住民による交流イベントの開催や地域の問題を話し合うシンポジウムやワークショップ、また観光客や地域外の人々へのPRを含めた交流等がある。ここでは地域の人々が行動を起こし、まずは人々の交流の場をつくることが目的とされている。地域から離れがちに

なった人々にあらためて地域に目を向け、足を運んでもらうきっかけを作るということがここでの主たる狙いとなっているのである。

② 街並みの統一、古くからの街並みの再現

また、対人サービスを基本とする第三次産業を盛り上げるため、人々にとって魅力となるものを整備するという動きも見られた。これは主にハード事業に関するものであり、町並みの再整備が代表的なものである。うまくいけば観光客を誘致でき、それを相手とした産業が生まれることが期待できる。ただ、こうした事業はかなりの投資がかかり、また地域住民同士の事前のコンセンサスが必要となるため実際の運営は難しい。補助金などで整備だけはなされたが、実際に人々が戻ってきたといえばそうではない地域も存在する。人をいかに戻すのかということが第一であることを踏まえたうえでの整備、運営が求められるといえるだろう。

③ 市民団体の活動

サービス業の再活性化には、地域に人々が戻ってくることが必要である。この点において、地域の市民団体の役割は大きい。近年では、地元 NPO をはじめ、多くの団体組織が地域の活性化に向けて積極的に活動を展開している。問題を認識し、住民、観光客、行政といった多彩なアクターをつなぎ、そして全体をサポートする。そうした活動が地域に人々を呼び戻すきっかけとなり、それに伴ってサービス業も戻ってくることが期待される。地域の再活性化が達成できた地域では、このような市民活動によるアクションがなされているのである。

また、市民団体の活動拠点が確立されているケースも多い。拠点があることで、市民団体の活動に継続性が生まれるだけでなく、人々の交流の場としても機能する。こうしたことが地域の再活性化のきっかけとして機能することになっているのである。

（3）もたらされた結果

サービス業の復権を目指して取り組まれた各地域の各活動は、それぞれにおいてその目的を達成することになった。極めて大きな成功を果たした地域では、地域への来客数や観光客のリピーター増加などがみられた。また、中心街にある商業施設への集客が戻った地域もあった。一方、それほどの成果はなくとも、店舗を中心とした地域における小経済圏の再形成にむけた道筋を見いだした地域もあった。やはり、第三次産業で栄えた地域は、人々が戻ってくることでかつての元気さを取り戻すことができるのである。ただ、当然、そうした流れをつくりだすことは簡単なことではない。しかし、それは不可能なことでもない。本章の分析から明らかなように、まずは少数の人でも動きはじめることが重要であり、その継続が次なる段階へつながっていく。地域の再活性は、まさに人によってもたらされる。そのことをあらためて確認することができた事例群であったといえるのである。

６．類型Ⅳ：「人口問題型」

（１）問題の所在

最後は地域における人口減少がもたらす衰退である。これは現在の日本の各地で起こっている現象である。都市においても、地方においても、地域内の住民が減少することによって地域全体の活力が減少し、またそれが地域からの人々の流出を招くという悪い流れをつくっている。では、このような問題に対し、地域はどのような対応を取っていけばよいのか。

減少した地域の人口を回復させることは容易ではない。各地域もそのことは理解している。ただ、地域の活性化に成功した地域というのは、そのような状況を受け入れたうえで、それでもなお、地域に人がやってくるような活動を行っているところであった。では、そうした地域の活動とはどのようなものなのか。

（２）取られた対策

再び地域に人を呼び戻すことに成功していた地域で行われていたのは、地域の魅力を見いだすということであった。自分たちの地域にやってきてもらうためには人々を引きつけるものがいる。それを探しだし、アピールすることで地域に人を呼び込もうとしていたのである。ただ、それは簡単なことではない。もともと地域から人口が流出したのも、そこに人々を引きつけておくものがなかったためである。それゆえ、新たに魅力をアピールするといっても、そう簡単なことでなかったのである。

そうしたなかで、ひとつの突破口となったのが外部者の視点であった。内部のものには代わり映えのない見慣れたものであっても、それ以外のものにとっては、とても新鮮で、興味深くみえるものがある。地域では邪魔もの扱いされているものが、外から来る人にとってはとても貴重なものとして映る場合もある。そうした、それまで気づかなかった地域の資源をあらためて見いだすことで地域の魅力を再発見していく。そして地域への人の流れをつくりだす。このような動きが見られたのである。

さて、このような地域の魅力を再発見してもらううえで重要な存在が「外部者」であったが、近年、その外部者としての役割を果たしているのが大学生である。地元地域と大学生が協働で地域活性化プロジェクトを立ち上げ、大学生の視点を得ながら地域の魅力を再発見していくのである。大学生は都会に通うものであったり、地元のものであったりするが、重要なのは、地域に新鮮な視点を持ち込んでくれるということである。その視点がきっかけとなって議論が始まり、見方がかわり、そして魅力として認められる。こうしたプロセスを経て、多くの地域が自信を持っていくことになるのである。

（３）もたらされた成果

大学生をはじめとする外部者の視点の導入は地域に新たな動きをもたらすことになった。なかでも、特に重要なのは、地元住民の地域に対する認識の変化である。自分たちの地域の良さを改めて知ることで、自信を持って地域をアピールし、外からの人々を受け入れることができるようになっていったのである。また、このことは、地域の人々の結束を強めたともいえる。地域の良さをどのように伝えるべきかといったことを話し合うことで、前を向いたコミュニティが再構築されたケースが多くみられた。また、そこにはそれまでいなかったメンバーも加わり、新たなコミュニティが生まれていた。これは、元気のなかった地域にとって大きな動きであったといえる。そして、このようなコミュニティが拠点となって、実際に新たな事業がなされるようになっていった。新たな特産品の開発、体験型観光の実施、そして、U ターン、I ターンを含めた新たな住民の受け入れなど、新たな取り組みが各地でなされるようになっていったのである。

こうして、外部者の視点を取り入れることで活力を得た地域は、自らの地域のために積極的に行動を起こすようになっていく。確かに、こうした行動がすぐさま地域の人口減少に歯止めをかけるというわけではなかったが、それでも地域住民の意識が変わり、再び地域の良さを知ることになったことは大きな成果であった。そして、地域の人が自信を持つことがその地域の魅力を増し、それが結果として地域の再興につながっていったといえるのである。

７．小括

以上、本章では、全国各地の事例を検討し、地域の衰退の類型化とそれぞれに対応する対応策を帰納法的に導出してきた。近年では、地域の活性化について、コミュニティデザインやソーシャルデザインなどといった考え方が生まれ、各地でその手法を取りいれた活動実績が上がってきている。本分析でも、そうした各地の成功事例を対象として、そこに観られる共通の要因を捉えようとしてきたわけである。

結果、衰退しつつある地域にとって重要なものは、地域の人々の問題意識の共有であり、かつそれを踏まえた行動であることが明らかになった。元気のなくなった地域では、多くの住民がその現状を受け入れてしまう傾向がある。悲観的になりすぎたメンタリティが地域を覆っている。これが地域の衰退をさらに加速させてしまう。こうならないために必要なのが、現状をよしとしない問題意識であり、その共有であったといえる。また、地域には、まだまだ誇るべきものが残っているという事実も知る必要がある。そうすることで、はじめて地域の再活性化に向けた行動が取られることになったのである。

さらに、住民の意識の変化には、外部者の視点ということが大きな影響を持つということも改めて確認された。従来から、まちづくり等における「よそもの」の重要性について言及されることがあったが、今回の事例分析においても多くの地域でそれを確認することができた。また、そうした外部の人と一緒に作業をすることも大切であった。そして何より、外部からの視点や意見をきっかけに、地元の人々の考えが変わっていくことが最も大

きな意義を持っていたことを今回の分析は物語っていたといえる。そして、その意識の変化が行動につながっていったのである。

現在、日本には衰退しつつある地域が数多く存在する。本章で取り上げた地域は、そうしたなかで、ある意味、奇跡的に再興を果たしたものであったといえるかもしれない。従って、今回の分析を踏まえた提言やインプリケーションが自分たちの地域にはそぐわない、また適応できないものとして捉えられる可能性もある。御所まちでもそうしたことが起こらないとは言い切れない。しかし、今回の事例分析が訴えることは、まさにそうした感覚がもたらす危うさである。地域の振興は、そこに住まれている方々にとっての問題である。そして、その地域の住民でしか成し遂げることのできないものである。そうした「自分たちの地域は自分たちがよみがえらせる」という意識が醸成され、住民の協働が動き始めれば、地域も変わり始める。御所まちでは、いまそうした流れが生まれつつある。この流れが続くことで、御所まちは変わることができるのである。

【参考文献】

issue+design project・筧 裕介【監修】(2011)『地域を変えるデザイン―コミュニティが元気になる３０のアイデア』英治出版。

近江環人地域再生学座・森川稔（2011)『地域再生　滋賀の挑戦』信評社。

山崎亮（2011)『コミュニティデザイン： 人がつながるしくみをつくる』学芸出版社。

山崎亮（2012)『コミュニティデザインの時代： 自分たちで「まち」をつくる』中央公論新社。

町家等地域資源発掘・発信事業「地域資源発掘活動報告書」の構成と分担

報告書構成		執筆・編集担当
はじめに	調査と報告にいたる経緯について	小松原 尚
第１章 御所まち町家調査の概要と考察	2012 年度調査集計結果、および 御所まちの観光振興に向けた分析	石川 敬之
	【補論】ごせまちなみまちや調査（※） 2010 年調査活動状況写真	岩井 里香 中嶋 千尋 前田 理奈 東 帆奈美 真下 瑞穂
第２章 歴史的町並み保存研究の考察と課題		東 帆奈美
第３章 地域振興にかんする先行事例の分析と御所まちへの適応可能性	地域づくりの事例分析からの類型化と御所まち振興への適応性の考察	石川 敬之 鴻池 祐香 辻 賢
資料	報告会次第など 調査対象地図	小松原 尚 楠 孝夫（NPO）

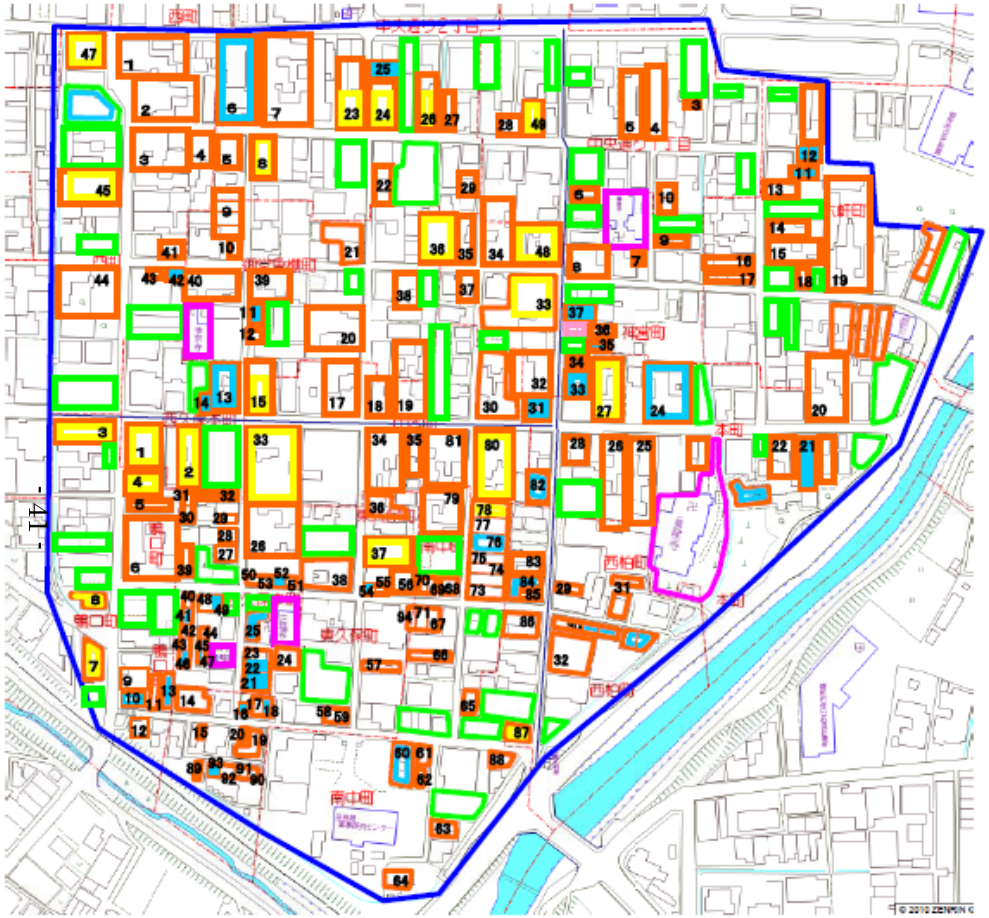
【所属】奈良県立大学

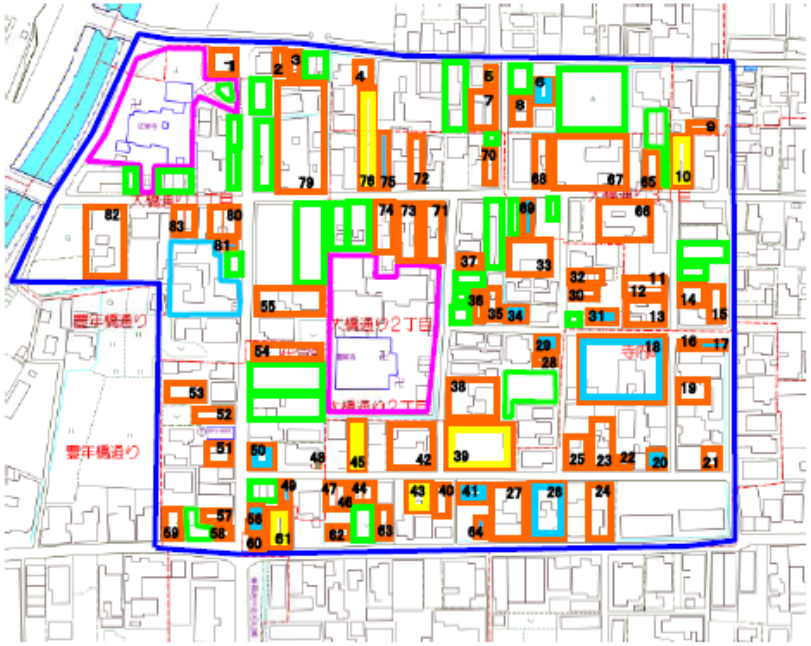
指導教員：小松原　尚、石川 敬之

学生：岩井 里香、中嶋 千尋、前田 理奈、東 帆奈美、真下 瑞穂、鴻池 祐香、辻 賢（順不動）

（※）2010 年 11 月 28 日、奈良県立大学の学生と NPO ごせまちネットワーク・創の皆さんとで、目視によるまちなみ観察を実施した。町家数の集計を種類別、地区別に行い、住宅総戸数も計数し、「悉皆調査 集計表」として整理した。この時の調査報告書を補論として加えた。

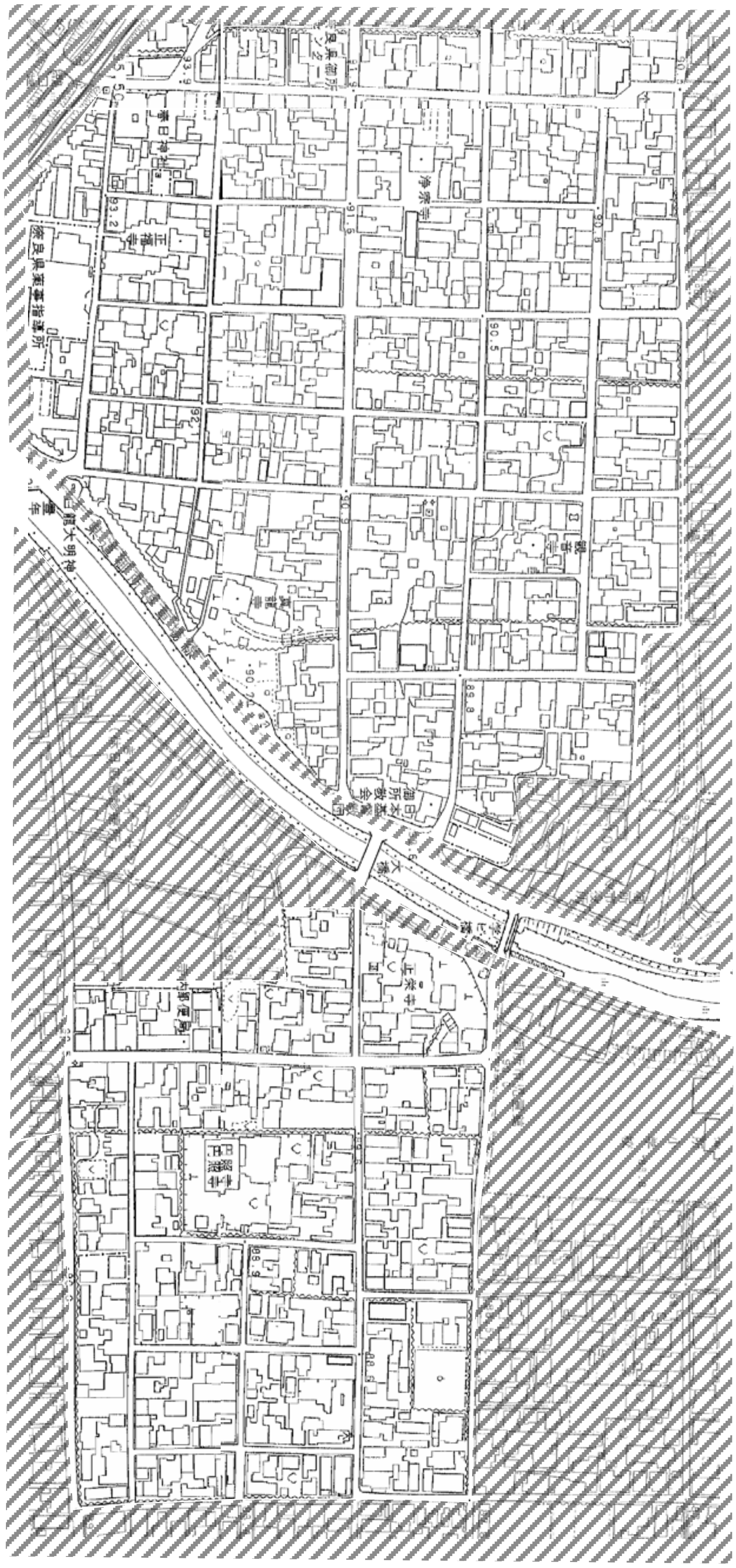
２０１２．７．３１　現在





町家
空家
町家商売
空地（駐車場）
社寺

聞取り調査範囲



北

南

調査・会議の記録

年月日	場所	指導教員	参加学生	活動内容
2012/08/07	御所市本町赤塚邸	小松原尚	金丸知矢、辻賢、志村和佳菜（３名）	「NPO ごせ」執行部の方での検討事項、学生の学修活動の範囲でのお手伝いの可能性について検討、意見交換した。
2012/10/27	御所市商工会議所会議室 中井邸	小松原尚	金丸知矢、辻賢、志村和佳菜、佐藤宇駿、大槻美奈、西尾和夏（６名）	今回の調査の意義と目的の再確認した後、まちや居住者・所有者への聞き取り調査のための質問項目や内容について打ち合わせた。今後の活動計画を示し、質疑応答を行った。アンケート用紙などを使いつつ、対象者への聞き取りのための試行調査も実施した。
2012/11/11	御所市内	小松原尚 石川敬之	竹本泰隆、加藤穂乃夏、大槻美奈、藤本菜緒子、佐藤宇駿、東恵利、東帆奈美、錦戸希美恵、辻賢、戸髙彩百合、金丸知矢（11 名）	奈良県立大学の研究室との協働で、御所まちにある町家に住まいされている方を中心に、意向調査を行なった。御所まちの町家を、より深く理解し、改めて我々の故郷の素晴らしさを再認識する機会ともした。
2012/12/01	御所市内	小松原尚	鴻池祐香、西尾和夏（２名）	前回の調査で訪問できなかったお宅に伺い、ご意見を聴取した。
2013/02/16	御所市商工経済会館	小松原尚 石川敬之	大槻美奈、東恵利、東帆奈美、錦戸希美恵、辻賢、鴻池祐香、西尾和夏、竹本泰隆、藤本菜緒子、金丸知矢、岡里奈（11 名）	町屋等地域資源発掘・発信事業に基づき、2012 年度に学生が実施した調査・研究活動の成果を報告した。

町家等地域資源発掘・発信事業

地域資源発掘活動報告会

日時：2013 年 2 月 16 日 16 時 30 分から 18 時 30 分
会場：御所市商工会館ホール

プログラム

時間	内容
16:30-16:35	開会のあいさつ　NPO ごせまちネットワーク・創 理事長　角南 長弘
16:35-16:55	第Ⅰ部　「NPO ごせまちネットワーク・創」を語る 話し手：楠 孝夫（NPO ごせまちネットワーク・創　監事） 聞き手：石川 敬之（奈良県立大学　准教授）
17:00-17:45	第Ⅱ部　奈良県立大学学生による課題研究発表
17:00-17:05	［１］「町並み保存先行研究のまとめ」　東 帆奈美（小松原研究室４年）
17:05-17:15	［２］「御所アンケート調査結果」　大槻美奈、錦戸希美恵 （石川研究室１年）
17:15-17:25	［３］「すてきなまち　ごせまち」　西尾和夏、東 恵利（石川研究室１年）
17:25-17:45	［４］「地域づくりの事例分析からの類型化による研究調査～御所まちはどのタイプ？～」　鴻池祐香（中谷研究室２年）、辻 賢（城戸研究室３年）
17:50-18:25	第Ⅲ部　ごせまちの皆さんとのワークショップ
18:25-18:30	まとめにかえて　小松原 尚（奈良県立大学 教授）